

高橋龍雄著



國語科
教授用
發音教授法

東京 同文館藏版

國語教授は
一變せぬば
ならぬ

高橋龍雄氏の發音教授法の序として

明治三十四年八月三十日

文學博士 上田 萬年

誌す

凡 例

一本書は、主として小學校國語科教授法中、最も緊要であるべき發音教授法が、缺けて居るのを、補はうとて、編述致しました。併し中學の教員諸氏にも、わけてまた師範の教員諸氏にも、讀んでもらひたいと存じます。

一本書は三年前に『國文學界』といふ雜誌に書いた「言語學」や、また今春より『小學校教員檢定受驗用學科講義錄』といふ雜誌に連載した「國語教授法」を元として多少の潤飾を加へました。興味がなければ、かういふやうな最新の科學は、多くの教育家に傳播せられないと思ひましたから。併しあまり不馴な言文一致體で書いたので、自分ながらその惡文を耻しう存じます。

一本書の表や挿畫は、決して自分の出鱈目に作出したものではありません。

あつ子音分類表は

Max Müller's Lecture on the science of language.

J. Peile's philology.

Helmholtz's Sensation of Tone.

Andre Lefevere's Race and Language.

Delbruck's Indogermanische Grammatiken

Henry Sweet's A Hand book of Phonetics.

G. H. von Meyer's The Organ of Speech.

A. Melville Bell's Visible Speech.

W. D. Whitney's Language and Study of Language.

上田萬年先生の國語のため

金澤庄三郎先生の講義

伊澤脩二先生の視活法

藤岡勝二氏八杉貞利氏の言語學入門（言語學雜誌）

岡倉由三郎氏の言語學（國語漢文講義錄）

の諸書を比較涉獵してまとめました。多少の差異は諸書相互にある事で、自分の表もまた自分の考が少しはあるけれど、大体に於ては異つて居らぬと信じます。又生理解剖學音響學に關する記事及び挿畫については、

H. Gray's Anatomy.

Hitchcock's Anatomy and Physiology.

E. W. Scripture's Researches in Experimental Phonetics.

G. H. von Meyer's Organ of Speech.

J. pelle's philology.

Chamber's Encyclopaedia.

M. J. Jamin's De Physique

伊澤先生の視活法

永松東海氏の生理學

富永兼棠氏の生理學講義

などに據つて、成るべく正確に公平に、誤がないやうにと彼此斟酌致しました。されば本書に載せたる表及び圖畫は、學校用の掛圖として教授に供せらるゝも宜からうと存じます。

一以上の諸書を涉獵する事を得たのは、第一に理科大学の坪井正五郎先生やまた上田博士の御蔭で文科大学の國語研究室にある、保科新村八杉諸氏の便益を與へくだされたのは、著者の深く謝する所であります。又音響學の條々について學友野原休一氏が懇切なる忠言を與へられましたのも、深く謝すべき事であります。殊に本書を印刷しようとする際に、伊澤修二先生

が予を視活法の講習會に臨ませて、實地の御教授を受ける事を得させられたのは誠に感謝すべき次第であります。

一本書は以上に述べたやうに、西洋の碩儒をはじめ、本邦の諸先生諸知己の庇蔭によつて成つたものでありますが、唯自分の淺學ゆゑに、それらの賜を無にしたやうな失策もあらうかと、恐縮致して居ります。

一本書は紙數に制限もあり、記事にも亦一定の範圍がありますので、思ふやうに鈍筆を揮ふわけにまゐりませんでした。著者は唯言語學聲音學の傳道者を以て自信し、聊か國語界の爲めに盡さうといふ微衷に過ぎません。

明治三十四年八月

高 橋 龍 雄

識 す

目次

緒論

人と言語……………

頁數
一

言語と國語……………

四

言語と聲音……………

六

第一章 音とは何ぞ

音の種類……………

六

樂音の性質……………

七

強弱……………

九

高低……………

一〇

音色……………

一二

第二章 發聲機關

發聲機關の種類及び解剖……………一六

聲帶……………一八

共鳴と口腔……………二一

第三章 母音

聲音の大別……………二四

母音の定義……………二五

母音發聲の状態……………二八

母音發聲の難易……………三二

第四章 子音

昔の子音研究……………三三

羅馬字と子音.....	三六
子音の分類.....	三七
子音の種類.....	三七
子音の性質.....	四二
子音發聲の状態.....	四四
第五章 五十音圖の解剖	
五十音の本質.....	五一
母音の假名文字.....	五二
子音の假名文字.....	五三
五十音圖の同行異性質.....	五七
拗音假名.....	五九
字音假名.....	六二

標準音と訛音……………六三

第六章 發音教授の豫備

耳の解剖及び受聽力……………六四

耳の練習……………七〇

國語科と唱歌科……………七一

腹部の充實……………七二

舌の運動……………七四

軟蓋の運動……………七五

唇の運動……………七六

第七章 發音矯正の例

母音の矯正

子音の矯正

(一) イとウとの混同.....	七八
(二) イとエとの混同.....	八〇
(三) イとユとの混同.....	八一
子音の矯正	
(一) キとチとの混同.....	八三
(二) キとケとの混同.....	八四
(三) ギとゲとの混同.....	八四
(四) ガ イ とギ ャ との混同.....	八五
(五) カとク ッ との矯正.....	八五
(六) ガとグ ッ との矯正.....	八六
(七) シとヒとの混同.....	八七
(八) シとスとの混同.....	八八
(九) セとシェ エ との混同.....	八九

(十)ゼとジェとの混同.....	八九
(十一)ジとヂとの矯正.....	八九
(十二)ズとヅとの矯正.....	九〇
(十三)チとツとの混同.....	九二
(十四)ヒとフとの混同.....	九二
(十五)ヒとフイとの混同.....	九三
(十六)ヘとフエとの混同.....	九三
(十七)ロとドとの混同.....	九四
(十八)リとズとの混同.....	九五
訛音と文字.....	九七
第八章 發音と文字との關係	
文字の本質.....	九八
假名文字の不完全.....	九九

表の目次

假名遣の原因.....	一〇〇
字音假名遣と國語假名遣.....	一〇〇
國語綴字法の可否.....	一〇一
國語綴字法の教授例.....	一〇三
文字と發音との難易.....	一一〇
國語の愛と國家の愛.....	一一五
國語と口語と聲音學.....	一二六
音の表.....	七
樂音の表.....	九

圖の目次

聲音の表……………	二五
母音の表……………	二六
子音用羅馬字の表……………	二六
子音分類表(種類上の)……………	二七
子音分類表(種類及び性質上の)……………	四〇
五十音圖解剖表……………	五三
拗音表……………	五九
字音表……………	六二
第一圖 音の強弱高低の圖……………	九
第二圖 音波の圖……………	一三

第三圖	發聲機關の圖	一六
第四圖	聲帶の圖	一八
第五圖	音叉及び共鳴室の圖	二二
第六圖	母音發聲の圖	二七
第七圖	舌の位置(母音發聲の)	二八
第八圖	唇の位置(母音發聲の)	三〇
第九圖	舌本音發聲の圖	四四
第十圖	舌上音發聲の圖	四五
第十一圖	舌頭音發聲の圖	四六
第十二圖	唇音發聲の圖	四七
第十三圖	耳の圖	六六
第十四圖	軟蓋の運動	七五

目

次

終

國語科
教授用 發音教授法

高橋龍雄 著

緒論

人は萬物の靈長であるか、こは人が人自身を自負した人間の定義である。人は道具を使ふ動物であるか、これも人間を他動物界から區別する程の、確な定義ではない。あゝ人とは何ぞ、あらゆる學者は、この定義を確めむ爲めに、辛苦し憂慮したのである。

人は人自らを解釋せねばならぬ。人は果して言語を有つて居るので、萬物の靈長であらうか、ゴリラとか、チンパンジイとかいふ、高等な類人猿は、最

も劣等な人類といはれて居る、ホッテントットや、バンクーバーの主人の言語よりも、一層勝つた言語音聲を有つて居るかも知れぬ。成程かういふやうに、極端と極端との例をもつてくると、言語を有つて居ると居ないとで、人間と他動物とを區別する事は出来ぬ。丁度動物と植物との區別を立てる時に、最下等のアミイバーと、高等植物の蠅取草との間に、判然とした區別がないやうなもので、兩極端を捕へてくると、區別とか定義とかいふものも、やゝ曖昧になつてくる。

併し常識の上からいふと、動物植物の區分が明かに立つて居るやうに、言語で以て、人間と他動物界とを識別するが出来る。手と足との長さが大抵同じく、頭の骨が大抵丸いとかいふやうな、人類學上の人間の定義を、強ひて擔ぎ出さないでも、言語が話せるから、人間であるといへば、人自らが人を解釋した、およその定義として、まづ差支はあるまい。偏理窟家は、されば啞

は人間でないか、といふでもあらうが、これは戦争か又は病氣で、四肢を失つた人を指して、人間ではないと、いふのと、同論である。況んや啞は言語が發聲せられないのではなく、聽官の不具からくるのではないか。見よ、盲啞學校の生徒を、ベル氏が發明した、視話文字で、すら／＼と讀書する啞生を見なんだか。

世に一番不幸なものは、何であるかといへば、秀麗なる富嶽、または可憐なる妻子を見る事が出來ぬ、盲者もあらうが、晝となく夜となく、人類社會の心意が、聲音によつて空中に充滿して居るのを、聞く事が出來ぬ啞者ほど、不幸なものはあるまい。眼を失つても、心は失れない、彼は聲で心を聞く事が出来る。併し言語發聲を奪て見よ、彼は全く心を奪はれたのである。彼は唯活世界を平面な繪畫と見て、終はらねばならぬ、盲者では古から學者もあつた、ミルトンにせよ、塙保己一にせよ。併し啞者では時の古今洋の東西、

未だ嘗て傑出した人がないのを見ても、啞者ほど不幸なものはあるまい。啞者たる音樂の妙調を、聞く事が出来ない位はまだしもの事、彼は實に人間第一の資格たる言語をもたぬから、死んでこの世を終らねばならぬ。

これ程言語は大切である、貴重である。これが無ければ、個人も社會も國家も、殆ど生存する事が出来ぬ。假りに生存したとした所で、巖石累々の死界で、生存する甲斐がない。否、言語がなかつたならば、社會を作る事も出来なかつたであらう。今日でも國家の生命は、國語の上に存して居るから、國語が亡んで國家が亡んだ實例がある、印度を見よ、布哇を見よ。また國語を亡ばさねば、全くの屬國とする事が出来ない爲めに、盛んに領國の國語を撲滅しようとして居る實例がある。佛土なる獨領アルサス、ローレンスの二洲を見よ。また露領のポーランドを見よ。而して又國語を勃起せしめて、國家の獨立を謀らうとして居る實例もある。日本語族と同脈なりと謂はれて居

る、なつかしい歐洲のハンガリー國などは、即ちそれである。

國語はこれ程大切である。貴重である。吾國が藩閥の墻屏を破てから、ここに三十餘年。殊に日清戰役後、國家的自覺心が勃興したと同時に、國語といふ眞義が解せられるやうになつたのは、非常に幸福な事である。併し國語統一といふ愉快な時代は、まだこないのである。而して一日も早く、この愉快な時代がくるやうにするのは、全國の小學校教師の雙肩にかゝつて居る、國家に對する一大責任にあらうと思ふ。それについてはまづ靜に言語國語の如何を、科學的に講究し、確固たる知識を基礎とし、科學的信念の下に、猛然と勃興して、この戰國時代の國語界に立たねばならぬ。徒らに附和雷同して、騒ぎ立てても、信念のない確志のない、輕薄な行爲は、一時の流行熱で、直に冷却して了うのである。國語に對する熱が醒めた時は、國民としては死んだ時である、諸君は死なんか、生きんか。

あ、言語國語は、これ程大切な、貴重な、必用なものである。さて言語とは何であるかといふに、『人間の思想が聲音によりて分拆的にあらはされるものである。』而して言語と思想との關係は、本書で述べべきものでないから、唯言語と聲音との關係を述べよう、これが即ち本書の趣旨である。耳ある者は聞け、目あるものは見よ、國語界の活問題。

第一章 音とは何ぞ

手にも取られず、目にも見えぬ、而してまた嗅ぐ事も、味ふ事も出来ない、音といふものは、果して何であらう。昔は實に不可思議なものとして、研究せられなかつたが、併し文明の力は、遂にこの麻迦不可思議の音を捕へて、箱

に容れ、蓄音器といふものを作るやうになつた。學問の力は、實に恐しいものではないか。

音を研究する學問は、物理學で、而かもその中の音響學 (Acoustics) といふ、一の専門學である。音を大別して、二とす。

音 (Sound) { 樂音 (Tone)
騒音 (Noise)

音とは、或物體の振動が、空氣に波動を與へて、聽官に達せられる時の、感覺をいふ。波動とは、物體の振動が、空氣に傳はる時の有様を、名づけたもので、これを音波といふ。譬へていふと、石を池の表面に投げた時に、その投げられた所を中心として、池面の水が波を起して、周圍に擴がつて行くとの同じ理で、音も目には見えぬが、波をうつて周圍に擴がるのである。そこで物理學者は色々な器械で、音聲の振動する時の波を寫し取るのである。

さてその振動の、一定時間に一定の波動を與へるものを、樂音といひ、これに反して、不規則な波動を與へるものを、騒音といふ。雷霆の轟く音、驚愕の叫び聲、平たくいへば、調子にのらぬ音が騒音である。併しこれはあまりに研究する必要がない、専門學者はいざ知らず。

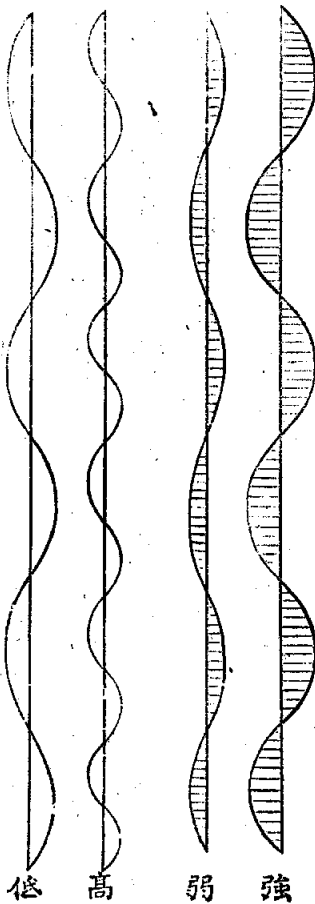
樂音こそ研究すべき價值のあるもので、この音は、物理學者がいはいゆる『溫度零度の空氣中で壓力七六〇ミリメートルの時三三〇、七メートルの速度をもつて居る』ものである。これを文學的にいへば、花に鳴く鶯、水にすむ蛙の歌も、この音である。はては松吹く嵐、磯にくだくる白波も、皆この樂音である。ピアノ、オルガン、ヴァイオリン、琴、尺八、三味線に至るまで、空の雲も動き、舟やかたの塵も散るといふ、美妙な音樂も、この樂音である。而して又實に、謹聽すべき教師の講演、親愛すべき朋友の談話、心の聲、心の音といはれる、人といふ人の言語も、即ちこの樂音に外ならない。この樂音

は、三つの性質をもつて居る。

強弱(Intensity).....振幅の廣狹
 樂音 { 高低(Pitch).....振動數の多少
 音色(Timbre).....副音の異同

音の強弱と高低とを説明するに、理窟をいへば、長くなるから、圖で示すと、左のやうになる。

圖の低高弱強の音
(圖一第)



即ち第一圖にある通り、音の強弱は、振動する時の幅の廣狹によるもので、振幅が廣い時は、強く、狹い時は弱いのである。例へていふと、大鼓を打つ時に強くうつと、軽くうつと、音の調子とはかへらないが、強と弱との差別は知れる。喇叭でも月琴でも、同じ調子になつて居るのを、軽く吹き又強く彈ずる時に、音の強弱が區別せられる。これは皆音の振動する時の、幅の廣狹によるものである。第一圖にある圖は、弱の振幅の倍を強にして示したのである。

次に音の高低といふのは、第一圖にある通り、振動数が多いと高くなり、少いと低くなる。第一圖は丁度倍の高低を示したものである。なほ樂器についていふと、ヴァイオリンでは、糸金が巻いてある一番太い糸が、一番低い音で、第四番目の一番細い糸が、一番高い音である、尺八でいふと、五孔を皆押へた筒音が、一番低い音で、裏孔が一番高い音である。その他どんな樂器

でも、皆高低の差をもつて居るので、種々な音を出すのである。西洋の樂譜では、これを七通りにわけて居る。

7	♯	Si	シ
6	♮	La	ラ
5	♮	Sol	ソ
4	♮	Fa	ファ
3	♮	Mi	ミ
2	♮	Re	レ
1	♮	Do	ド

としてある事は、誰も唱歌などにある事であるから、よく知つて居る事であらう。オルガンやピアノでいふと、一番よくわかる。即ちオクターヴといつて、この七調の音が、階級を成して、左から右に排列してある。

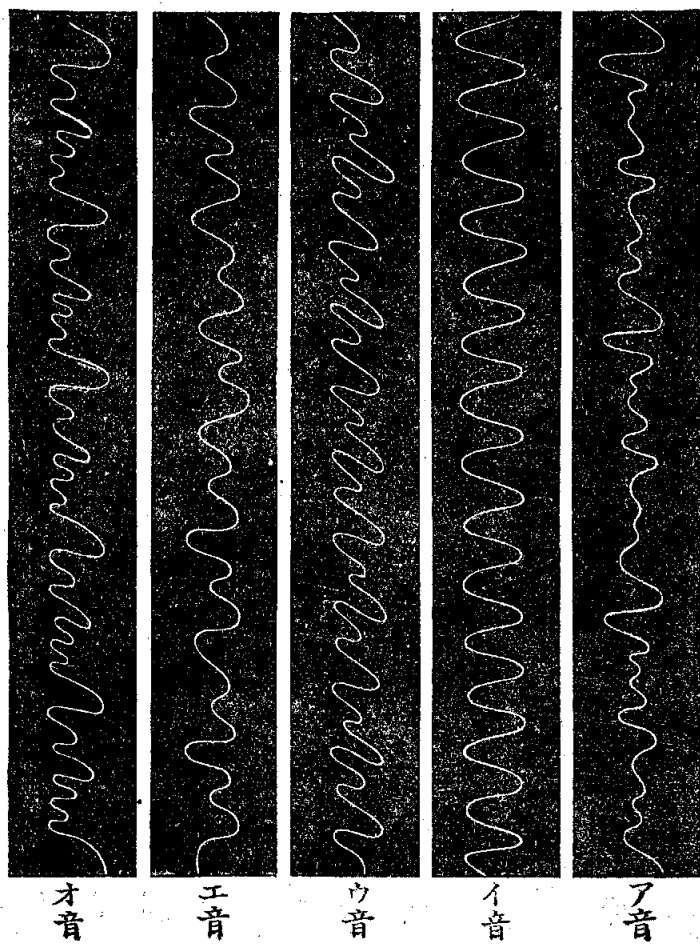
このやうに音の強弱と高低とは判然たる區別がある。然るに世人は往々その區別を混同し、『高聲で放歌すべからず』とか、『大聲にて談話すべからず』とかいふ事を、同じ義と心得て居る。高い聲で歌へばとて、決して八釜敷もあるまいし、低い聲で談話したとて、あまり他人の邪魔にならぬ事はあるまい。

通常の男子の聲の振動數は、テール即ち低音で八二、五乃至三二九、七、又バス即ち高音で一四八、五乃至四九五であるが、通常の女子の聲の振動數は、フルト即ち低音で一九七乃至七〇四、又ソプラーン即ち高音で二六四乃至一〇五六である。而して又サイレン (Siren) といふ器械にかけて見ると、通常の人々の耳では、二〇の振動數より下の低い音は聞く事が出来ぬ。又三〇〇〇の振動數より上の高い音は、聞く事が出来ないといふ事である。兩極端でいつた所で、二〇から三〇〇〇までの間の振動數を、吾人々類の耳にする事が出来るのであるが、日常の言語には、唯その中間の幾部分の振動で、話して居るのである。

次に音色といふ事は、その源因説明になると、至て高尚な學理である。併し簡短にいふと、凡ての物体が振動する時に、音波を起すのであるが、その中の主なる音波を基音といつて、それと同時に起る種々雜多の音波を、副音と

いふ。而して音色とは、その副音の異同で起るのである。例の略圖で示すと、

(圖二第) 圖の波音



右の第二圖は、西洋の聲音學者が、アイウエオの母音の音波を、器械にかけて寫しとつたものである。初め器械でとつた時は、細微なものであるのを、見易いやうに、大きく書き改めたのである。これは即ち前に述べた副音を異にする所からして、音色を異にする有様を、實驗したものである。なほ音色といふ事を、物理學から説くと、高尚難澁になつてくるから、通俗的に説述しておかう。人でいへば、男と、女と、小供と、日本人と、外國人と、樂器でいへば、糸ものと、管ものと、金屬のものと、皆それぐの音色が各種各別である。

さて音を研究する學問は、以上述べたやうな次第であるが、言語學上からは、殊に人の聲音をのみ研究すべきものであるから、これを聲音學 (Phonetics) といつて、一般の音響學の中から、又専門科として獨立して居る。本書は即ちその聲音學の事を、主として述ぶべきものであるから、まづ人の聲音はいか

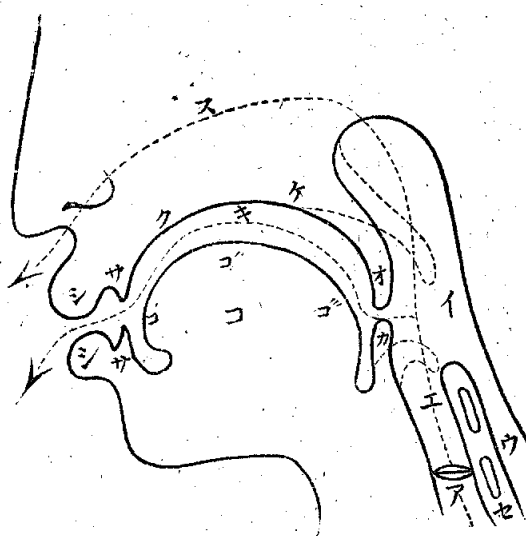
にして發せらるゝか、といふ根本問題から、研究して行かねばならぬ。これは又純然たる生理學解剖學の力を借らねばならぬ。

第二章 發聲機關

人の言語聲音は、どういふ機關によつて出るかといふに、造化の巧妙な機關で、肺臓の空氣が流れ出づる時、喉咽の内部にある聲帶といふものが、振動するのである。尤も亞弗利加の野蠻人ホントントツトといふ支族は、外部の空氣を内へ吸ふ時にも發音するといふ事であるが、これは實に除外例で、世界大多數の人類は、皆外へ出す時の氣息で發音するのである。笙や手風琴のやうに、出す息と吸ふ息とで、發音するのは、至極便利なやうではあるが、

實事はさうでない。かのホツテントツトといふ名義は、奇妙な變な音を出すものといふ義である。假りに内へ吸ふ息で發聲して見よ、不快な音が出る、

(圖三第) 圖の關機聲發



病人の煩悶の聲が臨死の人の呻吟する聲かに似て、誠に不快極まる音である。人の咽喉もやはりオルガンの舌のやうに、外へ出る息でばかり、發音せられ

るのが正當で。又至當で。而して便利で、優美である。

さて肺から出る空氣が、外へ出る時に、言語聲音が出來るとなれば、それが如何にして、又何故に、如何なる音を發するに至るかといふ事を、研究せねばならぬ。そこで生理學解剖學の力を借りて、發音に關係ある部分、即ち咽喉部の説明をせねばならぬ。

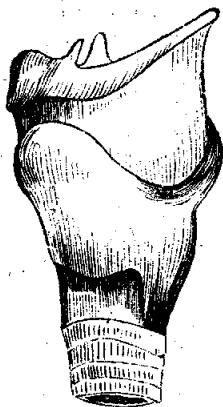
即ち第三圖にある通り、聲帶から出る音が、口へ出ると、鼻へぬけると、の二つになつて居る。而して鼻へぬける時は、軟口蓋が下に垂れるのである。軟口蓋の中央の端に垂れて居るものが懸壅垂で、口を大きく開いて、鏡に照して見ると、よくわかる。而してその下にある會厭は、口の蓋であつて飲食する時、食物が肺へ行かぬやうに、第二圖(セ)の軟骨の上に、横に倒れ塞がりて、その通路を遮斷するのである。食事しながら、物を言ふ事が、出來ぬのは、この爲めである。又食事しながら、強ひて言はうとすると、肺の空氣が

一時に迸發して、咳を生じ、食物が肺臓に入らぬやうに、正當防禦をなすのである。實に造化の巧妙が、自然に備つて居る事がわかる。

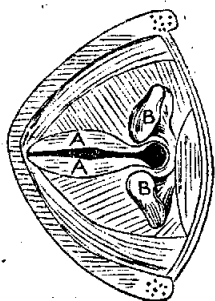
而して發聲機關の中で、最も大切なものは、音を起す本である所の、聲帶といふものであるから、これを少しく精密に説明せねばならぬ。併しこれをくどくしく説明すると、長くなるから、圖で示さう。

(圖四第) 圖の帶聲

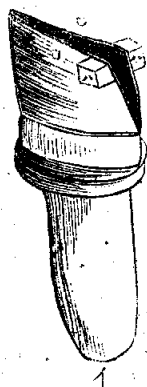
一、側面圖



二、平面圖



三、ウイリス氏の人工聲帶



即ち第四圖の第一は、聲帶を側面から見た圖で、外部の軟骨が累々と重なつて居るのである。喉頭部に手をあて、唾を吞んで見ると、ぐる／＼と上下に

動くものがある。俗にのと笛といふのは、即ちこれである。人によつては高く飛び出て居るから、外部からよく見える者もある。これは聲帶が大切に貯藏してある軟骨であつて、舌骨とか、會厭軟骨とか、甲狀軟骨とか、破裂軟骨とかいふ、種々な名稱がついて居て、都合九種の軟骨から成り立て居るが、これらの説明は言語聲音に關係が薄く、あまりに醫者らしくなつてくるから、止めよう。第三圖の第二は、聲帶を上から見た圖で、圖中のA Aは聲帶で、その間が聲門といつて、聲の出る所である。而してB Bは破裂軟骨といつて、聲が出る時に、左右に破裂するから、その名を得たものである。平たく言へば、木の葉を卷いて鳴らす柴笛といふものと、同じ具合で、兩方の聲帶が、下から突進する肺の空氣の爲めに、ビリ／＼と振動するので、聲音となるのである。英國の聲音學者のウィリスといふ人が、この聲帶の有様を容易く理解せしめようといふので、造られた人工聲帶は、即ち第四圖の第三に示した

やうな形で、下方は木製で、上部は皮で造つてある。この皮即ち圖中の口、口は、聲帶に當る。而してハ、ハはキルクやうのもので造つてあつて、破裂軟骨に當つて居る。そこで圖中のイ即ち下方の孔から息を吹き込むと、この皮の聲帶が振動するのである。丁度笙の舌の上に綠青が附けてあるとの同じ理で、この破裂軟骨は振動を助けて居るのである。而して聲の高いと低いとは、聲帶の長短によるもので、通常男子の聲帶は、女子の聲帶より長いから、男の聲は女の聲より、低いのである。これは風琴を解剖して見ると。調子が高くなる程、舌が短くなつて居るので、その理由が明瞭であらう。

この聲帶は、薄い軟な膜であつて、充分に振動しない時は、即ち呟き音を發するのである。通常の談話で、人に聞えるやうに發音するには、充分に振動させねばならぬ。又謠手が歌を謠ふ時は、非常に振動の度を高めるものであつて、この薄い軟な膜が、屈伸廣狹變化自在になるのである。樂器では皆そ

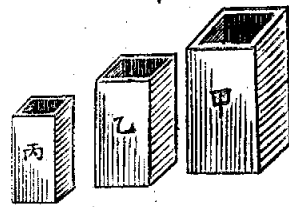
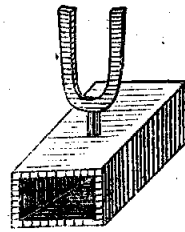
れぐの舌か孔かで、音を色々に變化させるけれども、聲帶は唯一つで、この變化極りなき樂器に伴はねばならぬから、聲帶の巧妙な事は、唱歌の時に當つて、充分に會得せられるであらう。

次にこの聲帶から出た音が、どういふ反響で鳴るかといふ事を、知るのが肝要である。三味線の胴に皮がなければ、又皮があつても破れて居ては、どんなに變な音がするかといふ事を知つて居る人は、言語發聲が、唯聲帶ばかりで、明瞭に發音せられるものでない事を知るであらう。人間の發聲機關中、この三味線の胴にあたつて居るものは、口腔（第三圖キ）で、物理學者はこれを共鳴室といつて居る。そこで又この共鳴室について簡短な説明を要するのである。

即ち第五圖に示してある、U字形のものは、金屬で作つてある。これは音叉（Tuning-fork）といふもので、最も單純な音を發するものとしてある。この音

又をヴァイオリンなどを擦る弓で、強く擦つて音を出すと、振動を初めるのであるが、それを第五圖の如く、木製の五方を圍んで一方を開けた木枕やう

圖の室鳴共び及又音
(圖五第)



の箱の上に差すと、一層のうなりを高めて、音が明かに聞えるのである。もしこの箱が鳴らぬ時は、第四圖にある如く、甲乙丙といふ各種の箱の口にあてがうて見れ

ば、どれかの箱が鳴るのである。これを共鳴室といふ。人の聲音が共鳴するのは、口腔である。口腔は即ちこの木箱の如き作用をなすものであるから、言語發聲の共鳴室である。

凡そ人の聲帯には、あまり差異はないが、口腔には大小廣狹の差があるので、各人各種の音色を異にする事が多い。それで聲音學者は、齒科醫がゴム

で齒の臺を作るやうなものをこしらへて、これを口腔に挿入して、他人の音色を眞似ね、又自分では到底發音が出来ぬ外國人の音をも、巧妙にその通りを眞似る事が出来るのである。これで見ても、口腔は非常に聲音を發する際に大切な關係を以て居る事を知らねばならぬ。

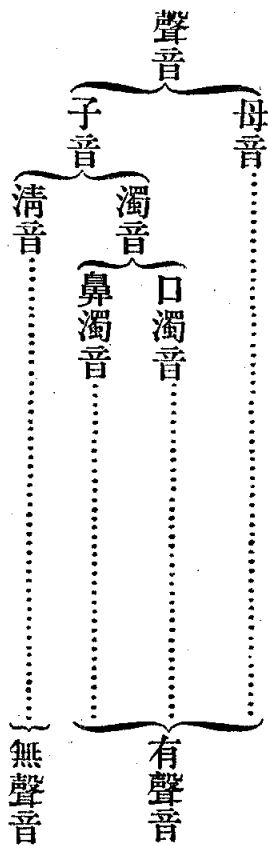
さて發音機關の中、聲帶と口腔との説明をしたが、その他のものも、皆それ／＼の職掌を以て居て、言語發聲の用をなして居る事はいふまでもない事であるが、あまりに生理學解剖學的の面倒な事になると、讀者も厭く事であらうから、速に言語の聲音に説き及ぼし、その中で發聲機關の作用を説明しよう。

第三章 母音

凡そ人の聲音を大別して、清音と濁音との二つとす。これは聲帶が振動すると、しないとで分るのであるから、發音しながら喉頭部へ手を當て、見るか、又は發音しながら、兩耳を兩手で堅く押へて見ると、聲帶が振動するのは、掌にその振動の響が感ぜられるのである。これが即ち濁音である。これに反して少しも聲帶の振動を感じないのは、清音である。清音は無聲音といひ、濁音は有聲音といふ。

人の聲音をまた二大別して、母音と子音とに分る事もある。この分ち方は前の清音濁音の區別と、丸で標準を異にして居る。即ち母音とは發聲機關中、唯口腔の障礙ばかりで發音せられるものであるが、子音は口腔の外、舌とか、唇とか、齒とか、鼻とか、いろ／＼の障礙によりて發音せられるもので

ある。この母音子音の區別は、實に明白な區別であるが、舊來の文法學者は皆これ程の單純な區別をも知らなかつたものと見えて、混同し誤解して居る。また母音は飽くまでも、聲帶の振動がなければ、發音せられぬものであるから、無論濁音であるべきのが、舊來の文法では、唯母音は單純な音であるから、清音であると思つたのも、大な間違である。以上述べた事を表に作つて見ると、



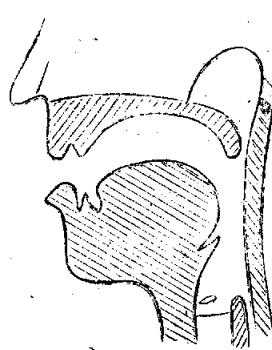
母音は國語でいふと、ア、イ、ウ、エ、オ、の五音である。なほ精密にいふ

と、十六通りの母音がある。けれどもそれはあまりに聲音學の専門に入るから、まづこの五種の母音について、説明する事としよう。このア、イ、ウ、エ、オ、といふ順序は、もと梵字の字母表の排列を取つたものであるから、決して聲音的の排列によつたものでない事は、勿論である。今これを聲音學上から分けて見ると、

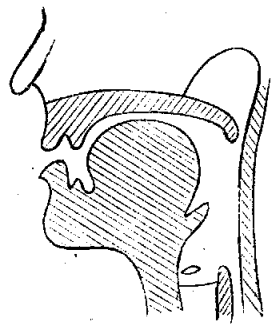
母音	喉頭的母音……………ア	オ	ウ
口腔的母音……………エ	イ		

即ちこの喉頭的母音のア、オ、ウ、といふのは、主として喉頭から發聲せられるので、口腔の障礙が少ないが、これに反してイ音とエ音とは、一層口腔に接近して、その反響を受けねばならぬから、強く發音する時は、振動數最も多く、而してイ音が一番口腔に接近し、即ち舌の中部を高めて、肺より出る空氣が通る路を狭くするのである。その反對で、ウ音は舌の本を口腔に近

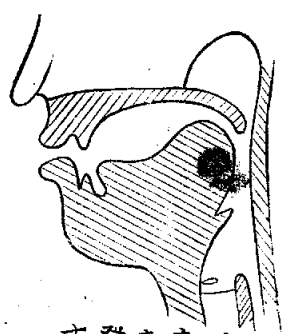
づけるから、低調となつて、振動数が最も少いのである。なほその母音發聲の解剖圖を見れば、一目瞭然である。



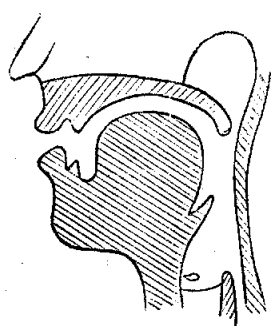
す發を音ア



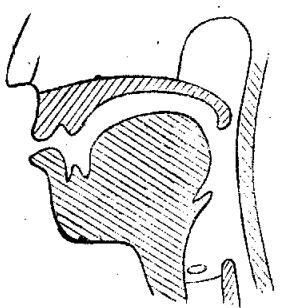
す發を音イ



す發を音ウ



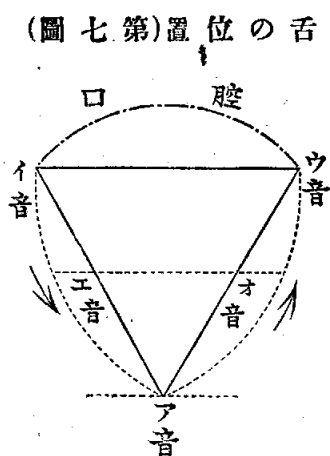
す發を音エ



す發を音オ

母音發聲の圖
(第六圖)

讀者は第六圖について、舌の位置と、それが口腔との距離如何に、よく目をとめて、母音各種の性質を研究せられねばならぬ。乃ちこの圖によつて、自ら實驗し、又生徒をして實驗せしめる必要がある。全体聲音の事は、唯書物の上で空論を吐くのでなく、事々物々皆實驗からこななければならぬ。かくてよく仔細に觀察すると、ア音を發する時は、舌と口腔との距離が、一番遠くて、イ音を發する時は、舌の前部で口腔に接近し、ウ音を發する時は、舌の後部で、口腔に接近する事がわかるであらう。而して又エ音とオ音とは、その中間の距離に存在して居る事もわかるであらう。

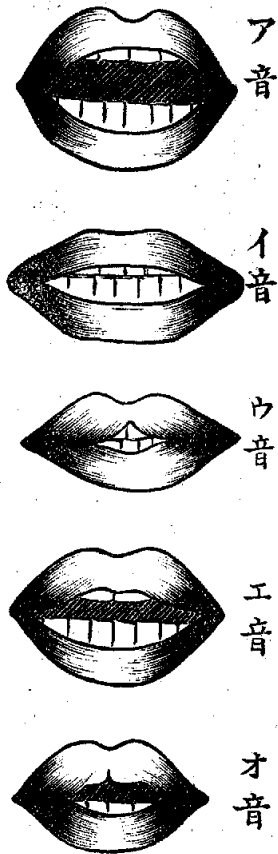


第七圖に示した三角形は、母音發聲の際、舌と口腔との距離を示す爲めに、作つたものであつて、三角形の底角は、口腔と最遠距離なる

ア音の位置を示し、上の一角はイ音、他の一角はウ音を示したので、その舌の前の部分と後の部分とで、口腔に接近する有様を、區別したのである。而してイ音よりア音に移る際に、その中央でエ音が發せられる事は、矢の方向で示してある。ア音からウ音に移る際に、オ音が出るのも、同じ關係である。試にイ音を發しながら、ア音に移らうとして見よ。必ずエといふ音が發せられるであらう。又ア音を發しながら、ウ音に移らうとすれば、必ずオ音が發せられる事が、わかるであらう。而して母音の種類が十六通りもあるといふのは、つまりこの音と音との間に、數多の種類を生ずるものである。併し國語では、この五種の母音の外は、あまり多く發音する必要がない。又發音するにも及ばぬ。

なほ鏡に向つて、これら五種の母音を發聲して見ると、唇の位置が各異つて居る事を發見するであらう。これは決して母音が唇の障礙によつて發せられ

るといふわけではないが、舌の位置が變する爲めに、唇の肉筋が連關して、變化を起すのである。今これを圖に書いて見ると、第八圖の如くなる。



(圖八第) 唇の位置

この唇の位置は、外部からよく見えるから、生徒に發音を教授する時には、至極便利な圖である。この圖の通りに、母音を發音させると、全く正しい母音を發せしむる事が出来る。なほ地方によつて、イとウとを混じ、又イとエとを混するなどの誤を匡正するには、この圖に示した唇の位置よりも、初の

間は一層強く唇の運動をなせ、而して後漸次に平調で、正しい母音を發する事が出来るやうにしなければならぬ。母音の教授は唱歌科では勿論の事、國語科でも、最も大切なもので、この訓練が充分でない時は、とても發音矯正などいふ事は、思ひもよらぬ事であるから、教師たる人は、眞によく母音の各性質を、學理的に實驗的に會得して、充分嚴密に、これが教授を施さねばならぬ。母音は實にすべての聲音の基礎であるから。

母音發聲の難易の順序をいふと、ア音とオ音とが、最も容易であらう。アーとか、オーとかいふ感嘆詞は、萬國皆同一である。又どんな小供でも、このアー、オーは、容易に發音する事が出来る。次はウ音であらう。これもあまり骨折なしに、發音せられるもので、ウメクとか、ウナルとかいふ語のもとを作つて居るので、自然に發音せられる事がわかる。最も困難なものは、イ音とエ音とである。これは前にも述べたる如く、口腔的母音であるから唱歌

で最も骨の折れるのは、この二音で、又この二音は種々の子音と結合して、多くの方言卑言となつて居るのであるから、まづ母音訓練の順序として、第一ア音、第二オ音、第三ウ音、第四エ音、第五イ音といふやうな順序にして、教授するがよからうと思ふ。

母音は、決して子音よりも發音するに容易であるといふいはれない。寧ろ子音よりも困難なものである。であるから發音教授の第一歩として、母音を教授するよりも、まづ子音の中の最も容易なものから始めて、その後母音との結合音を發音せしめ、再び母音教授に立ち返るといふ風にして、教授すべきものである。本書で母音をまづ第一着に説明したのは、聲音學上の順序として、これから説かねば、子音に及ばれぬからである。教授者は、勿論本書記載の順によつてはならぬ。本書の根本的智識の概念を以て、各教授法に關しては、教師自分に教案を作られねばならぬ。

第四章 子音

子音とは既に述べた如く、口腔の外、齒、唇、舌、鼻等の障礙によつて、發音せられるものである。昔の國語學者が、聲音分別の記憶歌を作つたのを見るに。

阿和也喉。あわやこう 多良奈は舌に。たらなはぜつ 加牙佐齒や。かげまし

波麻のふたつは。はま 唇の輕重。しん けいじゆう

といつて、中々巧妙な歌であるとして、吾々も小供の時、祖父から教へられた事があつたのを、今に記憶して居る。今日でも國學者の文典といふと、大抵皆こんなもので、ウ、ク、ス、ツ、ヌ、フ、ム、ユ、ル、の九音を、父音（本書でい

ふ子音の事)として、これにア、イ、ウ、エ、オ、の母音を配合すれば、五十音圖が出来ると思ひ。同行中の五音は、皆同一性質のものであると思つて居るのである。而して五十音圖外のものは、濁音とか半濁音とかいつて居た。これらは大變な誤で、とても御話にならぬのである。右の歌は別に解釋する程の價もないが、舊來の研究が、いかに粗雜であつたかといふ御笑草にまで、一言述べよう。まづ阿和也喉といふのは、阿行ア、イ、ウ、エ、オ。和行ワ、ヰ、ウ、エヲ。也行ヤ、イ、ユ、エ、ヨ。は喉音で、多行タ、チ、ツ、テ、ト。良行ラ、リ、ル、レ、ロ。奈行ナ、ニ、ヌ、ネ、ノ。は舌音で、加行カ、キ、ク、ケ、コ。は牙音、(奥齒の音といふ積り)。佐行サ、シ、ス、セ、ソ。は齒音で、波行ハ、ヒ、フ、ヘ、ホ。は唇の軽い音で、麻行マ、ミ、ム、メ、モ。は唇の重い音であるといふ義である。成程昔ではこれが名歌でもあつたらうが、今日から見ると、實に抱腹絶倒の至である。而して五十音圖外の、加行佐行多行波行の文字に二點を加へた文字を、濁音

といふのは、當つて居るが、波行の肩に圈點を加へたものを、半濁音といふに至ては、實に可笑しい。又次清音といった所で、瞬昧な語である。何で清音に次いで居る音であるか、少しもいはれがない。併し古の學者を笑つた所で、仕方がない、これから眞面目に、子音の如何なるものなるかを研究しよう。

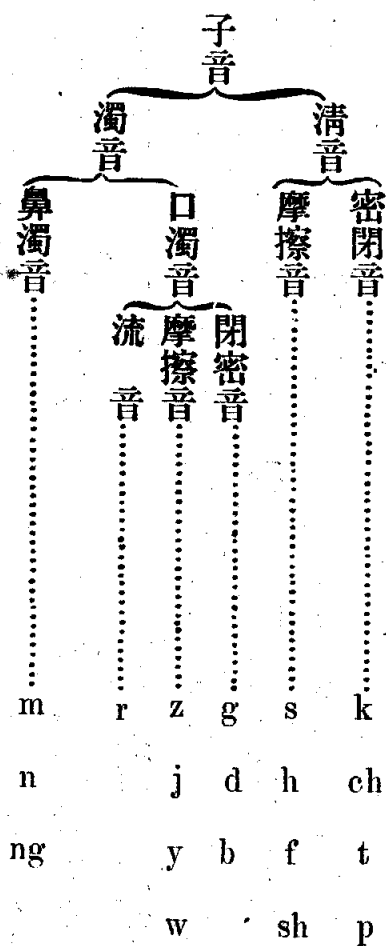
併しながら實に遺憾に堪へないのは、五十音文字といふものが、盡く獨立の子音をあらはす事が出来ない事である。昔の學者が、聲音學に疎かつたのは、生理學や解剖學が開けなかつた爲めでもあらうが、この假名文字が不完全であつたからであらうと思はれる。日本の文字は母音が五つと、其他子音と母音と抱合した成熟音が四十五音あるべきのが、伊呂波四十七文字で足るから、三文字減つて、四十七文字。これに二點を加へた文字が二十文字と、波行の唇音が五つ、その他五十音圖に入つて居らぬ文字が一つあつて、合計

七十三文字あるけれど、子音を獨立にあらはす事が出来る文字は、唯シの一文
字ばかりである。それでこの子音を論ずる時に、假名文字を使つては、大
變な誤解を來すから、まづ子音を論ずる前に、本書で使ふ羅馬字の表を示し
ておかねばならぬ。五十音圖の文字は、アイウエオを除きて、他の音は皆母
音と抱合して出來て居る成熟音であるから、子音をあらはさうといふには、
その中から母音を引かねばならぬ。即ち

ク-ウ=k	チ-イ=ch	タ-ア=t	フ-ウ=p
ス-ウ=s	ハ-ア=h	フ-ウ=f	シ-イ=sh
グ-ウ=g	ダ-ア=d	ブ-ウ=b	ズ-ウ=z
ジ-イ=j	ヤ-ア=y	ウ-ア=w	ル-ウ=r
ム-ウ=m	ン=n	鼻にかゝる(ヅ)ク-ウ=ヅ=ng	

まづこれだけあれば、國語の子音を論ずるに充分である。そこでこれを表に

作つて見ると、次のやうになる。



そこでこれから右表の説明をしよう。まづ清音濁音といふ事は、前章で述べた如く、聲帯の振動しないものと、するものとの區別の名である。右表に掲げた k ch t p s h f sh の八音は、皆聲帯を振動しないで發音する事が出来る。試に右の各音を發しつゝ、喉頭部に手を當てるか、又は兩耳を兩手で押

さへるかして、發音して見れば、直にわかる事である。であるから *pa pi* *pu pe po* を半濁音といふのは、大間違である事が明白であらう。又 *gd bz jy wr mn ng* の十一音は、盡く聲帶の振動するものであるから、獨音である。而してこれに口からと鼻からと出る二種の音がある。これを口濁音、鼻濁音といふ。鼻濁音の中で、*ng* といふ音は、無論日本の假名文字にないが、近來加行文字に一點を加へてあらはす事あり。東京の人などが、常にガギグゲゴを鼻にかけていふ時の音である。而して又密閉音摩擦音といふ名稱は、大に注意すべきものである。密閉音とは、その音を發する時、即ち密閉せられるので、その音を發するや否や直に斷止する傾がある。これに反して摩擦音といふのは、摩擦して出るから、その音を長くつゞける事が出来る。*sh fh sh z jy w* などを實地に發音して見よ、いづれも長くその音を引く事が出来る。それで舊來の國學者が、母音ばかりが長くその發音を續

けられる音であるといつて居たのは、大間違である事が明白に成つてくるのである。而してrは摩擦音の種類であるけれども、少しく趣を異にして居るから、流音と名づけたのである。蓋し舌を曲げて、その間から流れ出づる傾向があるから、いつたものである。日本語にはないが、朝鮮語や西洋語には、この流音の外に^{エル}lといふ音もある。併し國語では必要がないから省く。

以上の表は、子音の種類上から區別したものであるが、又その發聲の状態によつて、そが性質上から、區別する事が出来る。これは前表よりも一層有用なもので、子音の性質を明かにするには、是非ともこの性質上の分別を悉知せねばならぬ。

そこで子音の種類と性質とを一括して、表に作つて示さう。

まづ右の表を順次に説明しよう。

清音、濁音、

音			子			種性	
音 開			音 閉			類 質	
流音	濁音	清音	鼻音	濁音	清音		
			ng	g	k	喉音	舌本音
		h				的喉 的喉音	
	y				ch	顎音	舌上音
r	j	sh				的顎 的顎音	
	(dz)	(ts)	n	d	t	齒音	舌頭音
	z	s				的齒 的齒音	
	w	f	m	b	p	唇音	

鼻音、流音のある事は、既に／＼説明したが、閉音と開音とは、この表で出て来た名稱である。さて閉音とは、前表でいつた密閉音と鼻濁音とを合併していふ名稱であつて、その發音が閉ぢられて居る傾があるから、いつたのである。而して開音とは、その反對で、前表でいつた摩擦音と流音とを合併した名稱であるから、その發音を長く續ける事が出来て、即ちやゝ口を開いて發音する傾があるから、いつたのである。併しこの閉音と開音とを、斷音と續音との義であると、心得てはならぬ。開音は長くその發音を續ける事が出来るから、續音といつてもよいが、閉音は決してその反對で、斷音である。早斷してはならぬ。閉音の中の鼻音 ng nm は、皆長くその發音を續ける事が出来るではないか。この閉音開音といふ名稱は、舊の音韻學者が用ひた名稱であつて、英語の Mutes と Spirants とに、當つて居るものと思はれる。

次に子音の各性質を説明しよう。まづ、

(一) 喉音といふのは、喉頭から發音せられるもので、k g ng の如きものをいふ。

(二) 喉的摩擦音とは、喉の音ではあるけれど、摩擦音の性質を有つて居るから、喉音的摩擦音といふ事を略言して、喉的摩擦音といつたのである。h の如きは即ちそれである。

以上の二音は、舌の後部で發聲せられるから、二つ併せて舌本音ともいふ。

(三) 顎音は、主として上顎即ち口腔に觸れて、發音せられるので、上顎音といふ事を顎音と略していふのである。

(四) 顎的摩擦音は、上顎的摩擦音といふ事で、顎的ではあるが、摩擦して出されるのをいつたものである。

以上の二音を、舌の位置から見ると、舌の中央部で發音せられる感があるから、この二つを併せて舌上音ともいふ。

- (五) 齒音は、主として齒の障礙によつて發音せられるものであるから、齒の抜けた人には、完全に發音する事が出来ぬ音である。t d n の音を、齒の抜けた人に發音させて見よ。

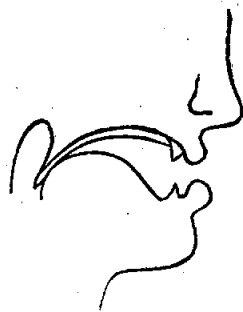
- (六) 齒的摩擦音とは、齒的摩擦音といふ義。これは一層齒に故障のある人の、到底發音されない音である。s z の音の如く。

以上の二音を、舌の位置から見ると、舌の前部で發音せられる傾があるから、これらを舌頭音ともいふ。

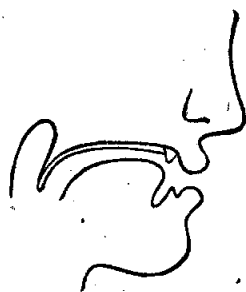
- (七) 唇音とは、讀んで字の如く、唇の音である、p b m f w の如き音を、唇を押へ、又は唇を動かさないで、發音しようとしても、到底出来へからざる事は、明かである。

以上述べた喉音、喉的摩擦音、即ち舌本音、顎音、顎的摩擦音、即ち舌上音、齒音、齒的摩擦音、即ち舌頭音。と、唇音とは、子音の性質上の分類であつて、この性質を悉知する事が、聲音學の本領で、發音教授の基礎となるものであるから、充分に理會せられねばならぬ。そこでこれから、一々解剖圖に照らして、その有様を實地に示さう。

k g ŋ を發音す



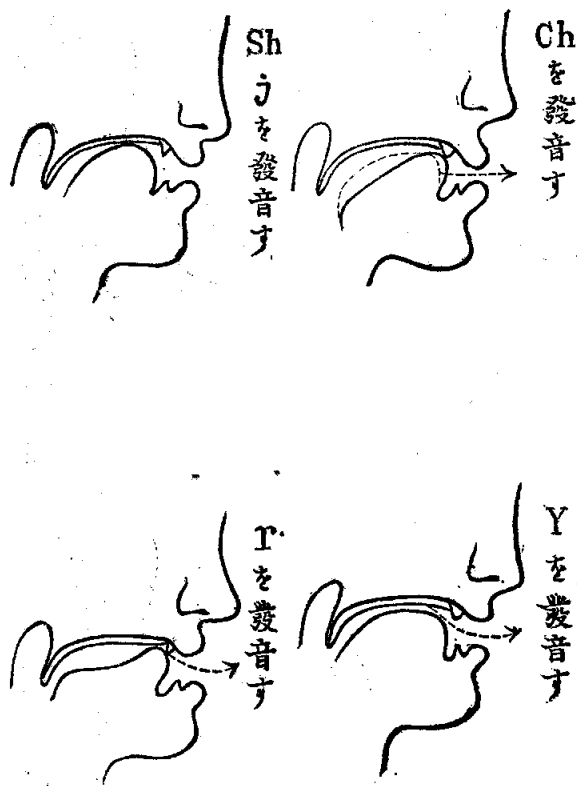
h を發音す



圖の聲發音本舌
(圖九第)

右の圖の如く、舌本音の内で、喉音と喉的摩擦音との差異は、明白である。而

(圖十第) 圖の聲發音上舌



して喉音の k g ng の三種は、殆ど同じ状態によつて發音せられる。そは不思議のやうであるが、決して同一の状態ではない、右の圖は唯その時の舌の位置を示したまでであるから、同一の状態として畫いたのであるけれど、k

Ch を發音す

Y を發音す

Sh を發音す

r を發音す

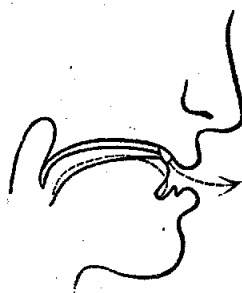
は清音で、聲帶が振動せぬ。g は濁音で、聲帶が振動する。ng は鼻音で、鼻にかゝるのである、唯右の圖は、舌の位置ばかりを示したものである事を、忘れてはならぬ。

第十圖も、皆舌の中央部で出る舌上音であるが、くはしくいへば、顎音と顎

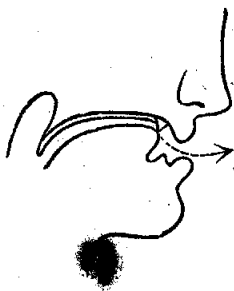
t d n を發音す



ts dz を發音す



s z を發音す



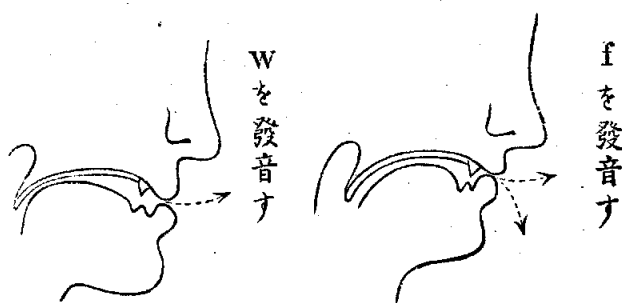
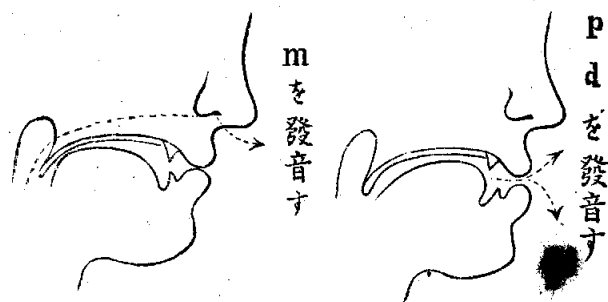
發音を實驗し、その異同を充分に會得せられねばならぬ。次は舌頭音である。

第十一圖によると t

d n は同じ舌の状態

であるが、清音と濁音と鼻音との差があるので、發音が異つて居る。又 s

(圖二十第) 圖の聲發音唇



とZとも清濁の差別はあるが、舌の位置は同じ状態である。而してtsまたdsといふやうに、Tの清音とSの清音と合し、又Dの濁音と、Zの濁音と合したのも、舌の位置は同じである。このts dzは、國語でいふと、ツ又はヅといふ時の、最初の子音で、前に羅馬字で對照した如く、シーヤ=tsu-u=ts、ミーヤ=dzu-u=dz となるものである(英語ではdsとも書く本書第七章十二、ズとヅとの混同參

照

右の圖によれば、pの清音とbの濁音とは、その發音の際、舌の位置を同じ状態におくものであるが、他の唇音は、皆それ／＼その位置を異にして居る事を知らねばならぬ。

序に、以上の諸圖で示した内の、鼻音ngとnとmとの三種の、發聲の状態が、各異つて居る事を一言しよう。これは即ちngは舌本音の喉音であつて、第九圖に示したやうな状態となり、nは舌頭音の齒音で、第十一圖に示したやうな状態となり、又mは唇音で、第十二圖に示したやうな状態となるのである。この三種の鼻音は、古から知られて居つたものと見えて、ふるく音韻學者が、三内といつて居たのは、即ちこれである。nとmとは、(ん)と(む)との假名でも示してあるが、ngに至つては、これをあらはすべき假名がないから、その音がないと思つてはならぬ。例へば相模といふ字を、サガミと讀むのは、

相の音サウで、模の音ホからミに轉じたのであるが、サガミのガは、どうして出来たかといふに、相の音は決してサウでなくして、sangであるのだから、ガの音が出来たのである。これで見ても、ngといふ鼻音は、漢字の語尾に多くあるので、詩を作る人は、知つて居られるであらうが、七陽、八庚、九青、十蒸の韻字は、皆このngの鼻音である。今日でも、香港（ホンコン）といふのを、羅馬字でかくと、Hong-kongである。又ガギグゲゴの音も、東京などでは、この舌本音の喉音なる鼻音で、發音して居る事は、既に述べた通りである。

又nの鼻音も、細かに調査して居ると、三通りにも、四通りにもなる。梵字では、皆これらの諸種のn音をあらはすべき文字が、盡く備つて居るが、國語では方言を研究する言語學者の外は、まづあまり用がないから、この面倒な説明は、凡て省かう。併し昔からいつて居る如く、（シ）は（ニ）を撥ねたも

の、(ム)は(ミ)を撥ねたものといふのは、難波(ナニハ)をナンバといひ、神主(カミムシ)をカムヌシといふやうな例があつて、確にnとmとの區別をして居つたらしい。今日の口語で『行カナイ』といふ事を、『行カン』といふのは、『行カヌ』の撥音であるから、nの鼻音である。又文章語で『行カム』といふ時の(ム)は、muであつたのが、遂にmが落ちてuが残り、『行カウ』即ち羅馬字で *yukamu*.....*yukau*.....*yuko*. となつたのであらう。であるから、

行カン.....口語で行カナイといふ事

行カム.....文語で行カウといふ事

となるから、(ン)と(ム)との假名は、注意して書き分けた方が、多少は聲音學的の補助にもならうと思ふ。

併し到底聲音を直寫する文字は、出来ない。假名文字の如きは、今更いふまでもない事、羅馬字でも、不完全ではあるが、まづ國語の標準音の主なるも

のが書けるから、暫くこれを借りて、五十音圖を解剖分析して見よう。

第五章 五十音圖の解剖

第三章第四章に於て、母音及び子音の各性質、及びその發音を説明し終つたから、その母音と子音との抱合によつて出來て居る、五十音圖といふものを、聲音學上から解剖して見ると、前章の始にいつた、阿和也喉云々のやうな妙な歌が、大に誤て居る事がわかる。又五十音圖といふものは、左程神聖な、完全無缺な者でない事もわかる。又五十音圖の文字の排列は、必ず發音教授上の順序を追うたものでない事もわかる。而して實に五十音文字の各個の發音の性質が、明白になつてくる。

全體五十音圖は、前にいつた如く、その文字の形狀は漢字の片傍であるが、その排列の順序は、梵字のアルファベットに據つた事は少しも疑がない。上田博士の説に假名といふ語は、梵語のカラナであるといはれた。カラナは即ち發音及び文字などいふ義をもつて居る語である。高楠博士が示された『弘法大師在唐記抄』といふ本にある、漢字の五十音は、正しく梵語の字母表と一致して居る。又マクスミラー氏の梵文典や、モニエルウ、リアムス氏の梵英辭典などにある字母表を見ると、寸毫も疑なく日本假名の基である事がわかる。なほ梵字の排列を示してこれを確めたいが、餘波に及ぶから止めよう。ともかくも日本の假名は、その排列を梵字にとりながら、その字形を漢字にとつたので、實に千載の下その不都合を嘆かしむるやうな、失態を來したのである。

失態とは何か、梵字のやうに、子音と母音とが各別になつて居るならば、今

日ほど不自由を感じなかつたであらうが、漢字の片傍を取つた爲めに、音韻の事を論ずる段になると、實に不自由千萬なものである。又今日の言語を出來る限り、實際的に書きあらはす事も出來ねば、古の言語でさへ、その音節音調の如何を、精細に溯つて知る事が出來ないのである。

假名文字の事は、なほ卷末で詳論する積であるから、こゝではまづ五十音圖の聲音的解剖を試みよう。この圖の劈頭にあるアイウエオは、喉的母音と、口蓋的母音とに分けられる事は、既に述べた通りである。さてその他の子音、否子音と母音と抱合した成熟音といふものは、どうであるかといふに、前章で示した子音表の順序によつて、排列して見ると、

喉 音

カ	ka	キ	ki	ク	ku	ケ	ke	コ	ko (清音)
ガ	ga	ギ	gi	グ	gu	ゲ	ge	ゴ	go (濁音)

齒 音	顎的 轢音	顎 音	喉的 轢音
タ ta	ラ ○ ○ ra ja sha	ヤ ○ ya cha	ハ ○ ha nga
○ ti	リ ジ シ ri ji shi	○ ナ yi chi	ヒ hi ngi
○ tu	ル ○ ○ ru ju shu	ユ ○ yu chu	○ hu ngu
テ te	レ ○ ○ re je she	○ ○ ye che	ヘ he nge
ト to (清音)	ロ ○ ○ ro jo sho (流音) (濁音) (清音)	ヨ ○ yo cho (濁音) (清音)	ホ ○ ho ngo (清音) (鼻音)

唇

音

○ マ バ パ
fa ma ba pa

○ ミ ビ ビ
fi mi bi pi

フ ム ブ プ
fu mu bu pu

○ メ ペ ペ
fe me be pe

○ モ ボ ポ
fo mo bo po

(清音) (鼻音) (濁音) (清音)

ザ サ
za sa

○ ○
zi si

ズ ス
zu su

ゼ セ
ze se

ゾ ソ
zo so

(濁音) (清音)

齒的摩擦音

○ ○ ナ ダ
dza tsa na da

○ ○ ニ ゴ
dzi tsi ni di

ヅ ツ ヌ ○
dzu tsu nu du

○ ○ ネ チ
dze tse ne de

○ ○ ノ ド
dzo tso no do

(濁合音) (清合音) (鼻音) (濁音)

ワ wa ヰ wi ○ wu エ we ヲ wo (濁音)

これで見ると、五十音及び濁音次清音を加へた十五行七十五字も、二十一行
 一百〇五字なければ、日本の主要な聲音を、圖式に作る事が出来ぬ。五十音
 の内で、や行のレとエと和行の手との三字は、既に滅んだ文字で、以呂波四
 十七字と、他の濁音次清音廿五字、合計七十二字で、今日の國語は、かゝれ
 て居る。而して又濁音のヰズを、一のヰとし、ヰズを一のズとし、又和行の
 ヰエを滅ぼしてしまへば、六十七字に成つてしまふ。文字の滅ぶるのは、善
 い事であるが、音が滅るのは、どうであるか。文字の数が少くて、多くの音
 が書けるのが、一番よい事であるに相違ない。併し文字を滅しても、音を滅
 らすのは、どうであらう。殊に音の現存して居るのを、滅ぼさうといふのは、
 折角音の種類のない爲めに、耳で聞いて紛れる憂がある國語にとつて、不利
 ではあるまいか。

そはともかくも、古來の五十音文字には、鼻にかゝる加行の文字がなかつた、近來加行の清音假名に一點を加へて、これを示す事があるから、暫くこれに従つて、本書にもそれを書いて置いた。併し平假名の(が)と紛れるので、感服出來ない字形である。

次に波行ハヒフヘホは、決して同性質のものでない。その中のフは、確に唇音になつて居る。

また多行も異性質のものが混じて居る、ナは顎音で、タテトは齒音で、ツは齒音の清合音である。

また佐行のサスセソは、齒的摩擦音であるのに、シはひとり顎的摩擦音になつて居る。又所によつては、セ(せ)を、顎的摩擦音の *she* にいつて居るものもある。

また佐行の濁音も、佐行の清音と同じく、齒的摩擦音と顎的摩擦音と混じて居る。

而してゼ (ze) を所によつては、顎的摩擦音の *je* といつて居る。是非 (zehi) 錢 (zeni) を、*jehi* また *jeni* といふが如し。併し國語の標準音は、*ze* の濁音 *ze* である。

また多行の濁音 *ダヂヅデ* の中、*ヅ* は齒音の濁合音であつて、同じ齒音の中でも、*ヤ*、性質を異にして居る。而して *ヅ* (*dsu*) は大抵齒的摩擦音の *ズ* (*su*) に呼ばれ、*ヂ* (*di*) は大抵顎的摩擦音の *ジ* (*di*) に呼ばれて居る。土佐豊後あたりの人は、この區別が明に發音されて居るが、日本全國の大半は、皆この正確な區別が出来ないやうである。それでこれを標準音標準語としないといふ人も多いやうではあるが、吾人は出来る限り、その區別を標準音、少くとも教育上には、書籍上には、區別しておきたいと思ふ。それは音が滅亡するのを恐れるのと、日本の言語がそれが爲めに紛れるのとの二つの理由から、五十音圖を聲音學上から區分して見ると、このやうに入込んで居る。殊に拗

音までが入つて居る。チ文字、ツ文字、シ文字、及びジ文字、ヂ文字は、皆拗音である。拗音とは、頗る曖昧な名であるが、古の學者がいつた所で見ると、單純な成熟音、即ち直音の反對で、或音が複合してなつたものといふ義であるらしい。それでまづ拗音といふものを、悉く列記して見ると、次の通りになる。

喉 音

グ ッ	ク ッ	ギ ャ	ギ ャ	キ ャ
gwa	kwa	ngya	gya	kya

グ ェ	ク ェ	ギ ュ	ギ ュ	キ ュ
gwe	kwe	ngyu	gyu	kyu

グ ォ	ク ォ	ギ ョ	ギ ョ	キ ョ
gwo	kwo	ngyo	gyo	kyo

喉的發音

顎音

顎的發音

齒音

ニ _ャ	ヂ _ャ	リ _ャ	ジ _ャ	シ _ャ	チ _ャ	ヒ _ャ
nya	dya	rya	ja	sha	cha	hya

ニ _ュ	ヂ _ュ	リ _ュ	ジ _ュ	シ _ュ	チ _ュ	ヒ _ュ
nyu	di	ryu	ji	shi	chi	hya

ニ _ョ	ヂ _ョ	リ _ョ	ジ _ョ	シ _ョ	チ _ョ
nyo	dyu	ryo	ju	shu	chu

ヂ _ョ	ジ _ョ	シ _ョ	チ _ョ	ヒ _ョ
dyo	jo	sho	sho	hyo

齒的轉音

ツ^ア
tsa

ツ
tsu

ツ^オ
tso

唇 音

ピ^ヤ
pya

ピ^ユ
pyu

ピ^ヨ
pyo

ビ^ヤ
bya

ビ^ユ
byu

ビ^ヨ
byo

ミ^ヤ
mya

ミ^ユ
myu

ミ^ヨ
myo

となるのであるから、拗音の總數は五十二種ある。

次に文部省が小學校令で規定した、字音假名を見ると、第一オ、コ、ソ、ト、ノ、ホ、モ、ヨ、ロ、に長音符を加へた直音と、その他二種の拗音がある。これを簡明な表に作つて見ると。

(一)

キ	キ	シ	ナ	ニ	ヒ	ビ	ミ	リ
ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
kyō	gyō	shō	chō	nyō	hyō	byō	myō	ryō

(二)

キ	キ	シ	ナ	ニ	ヒ	ビ	ミ	リ
ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー	ー
kyū	gyū	shū	chū	nyū	hyū	byū	ryū	ryū

となるのである。前に掲げた拗音五十二種の中には、國語の中に多分は存しないものあらうが、この字音の拗音丈けは、小學校でも必要な國語の拗音で

ある。序に附記して置いたのは、字音假名といった所で、國語といふもの、中であるから、古の皇學者のやうに、唐囀りの音だ、汚れたきたない音であるとして、排列してはならぬ。新體詩を見よ、唱歌を見よ、この拗音がなければ、平々凡々な調で、殆ど音樂といへないではないか。拗音をつかはない。新體詩や、唱歌は、どんな巧妙な作曲家でも、人を感じしむる事は出来ない。國語は實にこの拗音を、大和言葉の内に錦と織りなしてこそ唐くれなるの、光彩陸離たる言語文學を作る事が出来る事を忘れてはならぬ。

なほ最後に一言しておくのは、國語に標準語があるやうに、國音にも標準音がなければならぬ。標準音と標準音との間の音をいふものは、訛音である。標準音は本章に列記したやうな者であるが、訛音は假名では勿論、羅馬字でも書けない音である。この訛音を矯正して、標準音を發せしめるのが、發音教授の任である。

第六章 發音教授の豫備

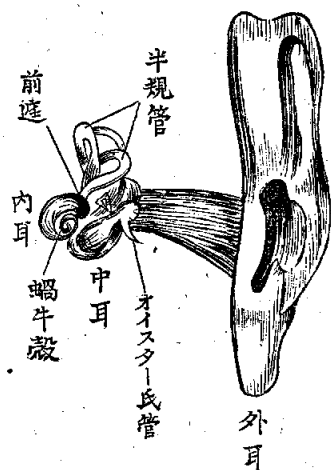
いままで述べ來つた所は、主として口に關する事で、聲音の各性質を、學理上から論述したのであるが、發音教授といふ段になると、口ばかりでは出來ない。それを聞きとる聽官、即ち耳の事を忘れてはならぬ。耳のわるいものは、どうしても正しき標準音の發聲を習得する事が出來ぬ。さて耳は唯單に受動的に孔があいて居るといふばかりではない、それを適當に訓練せねば、折角天工の巧妙を盡した耳朵も、役に立たぬ。聾は全く聞えないのであるが耳の訓練のない人は、その幾分は聾の如く、確に聲音を聞きとる事が出來ないから、やはり幾分の不具といはねばならぬ。音樂が出來ない人は、穴勝手

先が不器量であるといふわけではない、唱歌が出来ないといふは、決して口がわるいとか、聲がわるいといふ事でない。これらは皆耳がわるいのである。耳のわるいものは、發聲教授の任を負ふ事は出来ぬ、國語教員は、唱歌教員の如く、最も敏捷なる耳をもたねばならぬ。これは幾分か天賦による事であるけれど、訓練は確に耳をして、正確ならしむるものである。巧妙の域に達すると否との天品は、あるけれど。

そこで耳の事について、一わたり簡明な説明をしよう。耳はまづ外から見える外耳と、その奥にある中耳と、またその奥にある内耳との、三大部分から出来て居る。外耳と中耳との間は、管があつて、外部の聲音が空氣に波動を與へて、外耳の耳朶に觸れると、この管からその聲音が侵入して、中耳の門口の所にある、鼓膜といふものを打つのである。

鼓膜が聲音の打撃を感じると、直ちに中耳に反響を與へて、内耳に傳達する

（圖三十第）圖 の 耳



三の機關があつて、互に音を傳達反響して居るのである。わきて蝸牛殻といふのが最も巧妙なもので、平たく譬へていふと、オルガンかピアノかの如く、否それらよりも層一層精巧なる聲音の共鳴すべき、各種の器械を備へて居る。即ち外部から侵入した聲音が、一たびこの精巧なる器械に觸れると、その中の或る部分が共鳴するのである。丁度オルガンやピアノの前に立て、或聲音を發すると、その聲音と同調になつて居る音舌が、自然に鳴る事を實驗する事

のである。内耳は即ちその聲音を聞きわけける働きを有つて居る、巧妙精緻なる機關であつて、音の高低強弱音色等を、皆それ／＼聞きわけける事が出来る。これは即ち第十三圖にある通り、半規管、前庭、蝸牛殻といふ、水液様の中に浸つて居る、

が出来たるやうなものである。この共鳴といふ事が、音楽では非常に大切なものであるから、音楽室が他の室の建築と異らねばならぬ事も知れるし、又樂器の調子が合ふといふのも、共鳴する事であるし、他の樂器と合奏する時には、わけてこの共鳴が必要である。されば共鳴すべき位置に立て居らぬ樂器が、演奏室にあると、どうしても美妙的な樂が演奏せられない。東京の或る三味線の名家が、知友を尋ねた時、柱にかけてあつた三味線を見て、貴公は三味線が弾けると見える、調子がわかるか、との横平な問に、友もむつとして、調子がわからない程の下手でもないといふと、それではとて、直に三味線をとおりおろし、三本の糸を一二度弾いて、さて柱にかけておくと、折しも暮六つ時、小石川の傳通院の梵鐘が、ゴーンと一聲響き渡ると、その柱にかゝつて居る三味線が、ひとりで鳴り出した。鐘幾杵、その度毎に、この三味線は感應した。そこで調子がわかるといつた友も、感にうたれて、暫しはあいた口

がつむがなかつたといふ事である。

これが即ち内耳の蝸牛殻が、言語聲音の來る度毎に、感應して共鳴する理由を説くに、おもしろい實例である。かの三味線のは、唯梵鐘の黃鐘調わうしゅうより外は、一時に共鳴しない、もしその他の音に共鳴させやうとするには、各糸の緊弛を加減せねばならぬ。然るに人間の内耳は、いつでも種々様々な聲音を共鳴させる事が出来るのである。而かも狹い所で、而かも肉質で作つたもので、かゝる巧妙にして精緻なる作用があるとは、造化の精巧、實に驚嘆の至りに堪へない。

言語聲音が聞えるといふのは、即ちこの作用で、實際鳴るのではないが内耳の共鳴が聽神經を通じて、その感覺を意識に持ち込むのである。内耳は生理學者も、迷路といつて居る程の複雑な器能で、音聲がいかにして聞かれるかといふ事は、久ししく生理學者間の疑問であつた。今でも充分異說疑團がある

さうである。ともかくも、共鳴といふ事が、聞える原理であるので、この作用を器械に仕立たたものは、電話機である。蓄音機も亦この作用を、複現したのに過ぎない。而して第十三圖にある、オイスター管といふのは、即ちオイスター氏の發見した管で、鼻腔に通じて居る。これは聲音が一時に激烈に來た時に、その餘分を鼻腔に送り、口腔及び咽頭にまでも及ぼすのである。例へば大砲の發射せられたる時、口を開いて居ると、その音があまりにひどく感じないといふのは、即ちこのオイスター管が、鼻腔から口腔の方へその反響を洩らすからである。その他精細な説明に涉れば限もない事であるから、これ位にして置かう。ともかくも、幾種の聲音が内耳に感應せられるのはピアノやオルガン、否それ所ではない、まだく精巧なものであるけれども、平たく譬へていへば、ピアノやオルガンのやうに、種々な音を感應する器械が備つて居るやうなものである、といふ事だけは、よくく記憶せられね

ばならぬ。

さてかの耳の遅鈍な人といふのは、即ち破れオルガンや、こわれたピアノの前に立て、幾ら音を發しても、感應がないといふのと同じ理で、その人の内耳は、音を聞きわけける程の、機能を缺いて居るのである。オルガンやピアノの破損は、工人の手で修繕が出来るが、耳の受聽が力わるい人は、教師の訓練で、整頓させねばならぬ。

耳をよくするには、音楽が一番よろしい。學校でならば唱歌科に力を盡させるのである。殊に獨居の際、目を閉ちて五十音を發音したり、又樂器の調子を整へたりするのは、耳の受聽力を養ふに、有効な方法である。すべて目の力が働き過ぐると、耳の力は逆比例に減つてくるから、目を閉ちて聲音を練習するのが、一番よろしい。學校でならば、オルガンに背けて生徒を立たしめ、その音調を識別せしめ、若くは合唱させるがよい。唱歌科で目を閉ちて

歌ふのは、醜いけれど、眞に受聽力を發達させようといふのには、時々この法を行はねばなるまい。又唯に歌はせるばかりでなく、樂器も出來うる限りは、自ら手を下して奏演させるやうにせねばならぬ。木片、竹の篋、茶碗、皿の音でも、音樂に同調を求めさせるやうに、訓練すれば、餘程遲鈍な耳でも、漸次に音調を識別する事が出来るやうになる。

受聽力を修養する事は、發音教授上第一の豫備であつて、この豫備無しに、國語の發音を匡しても、骨折損の草臥もうけとなる事が多い。これが即ち國語科と唱歌科と、密接な關係を保つて居る點である。耳の訓練がほゞ出來たらば、次は直に發音の機能にとりかゝらねばならぬ。

發音の機能にとりかゝる前に、豫備として最も大切な事は、腹部の充實である。これは擊劒でも柔術でも、わが國の武道では、第一の用意として、氣を丹田臍下にくだすといふ事があるが、即ちその秘訣を守るのである。西洋風

にいふと、胸部を張りて姿勢を正しくする事である。併し兵式体操のやうに、胸を張りて尻を出し、腹を退かせるのでは無く、却て腹を前に張り出すのである。腹が空虚になると、身体の中心が保たれぬ。詳言すれば、臍の下に力がいって居なければ、座次進退、すべて度に違つてくる、劔法でも柔道でも、千變万化の働きをするのは、皆この腹部の充實から出てくるのである。これが實に姿勢を正くする、第一の秘訣である、

そも言語を發しようといふのにも、この姿勢が保てないでは、正しく發音する事が出来ぬ。古の謠手や、義太夫語りでさへ、この姿勢を取るのである。尺八の演奏などは、殊に入釜しく、この腹部の充實を訓練する事である。演説をする時、唱歌を謠ふ時、腹部に空氣が充満して居るやうに感ずる時は、流暢に巧妙に、演出する事が出来るけれども、腹が瘦せて、脊につくやうになつてくると、演説も唱歌も、盡く失敗に終る事は、實驗上直にわかる事である。

ある。されば通常の言語發聲、即ち談話の際でも、この腹部の充實といふ事が大切である事が知れるであらう。殊に弱音から強音に、低音から高音に進む時は、腹部の筋肉が緊張する事は、發聲しつゝ腹部に手をあて、見れば、直にわかる。腹で物がいへるものではないけれど、その積で發聲の準備を整へねばならぬ。口先で物をいふな、腹でいへとは、武士道の金言であるさうだが、移して以て言語教授の座右銘とするに足る。

さて發音機能の訓練は、大凡そ三つある。この三つは發音教授の豫備として、充分に訓練に訓練を重ね、ばならぬ肝要な事件である。さてその三要件とは、

第一 舌の運動

第二 軟蓋の運動

第三 唇の運動

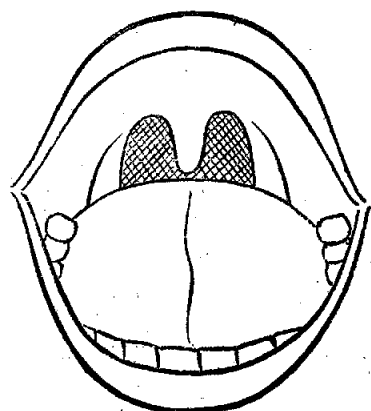
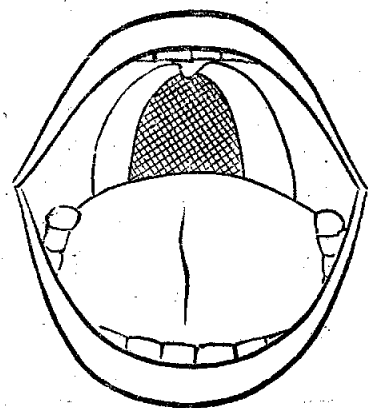
である。これが訓練をなすには、常に鏡を携帯せねばならぬ。教師も生徒も。

何となれば、これらの三者の發聲機關は、皆鏡に照らして、その實地を研究する事が出来るのである。

まづ舌の運動は、第七圖に示した如く、母音發聲の時の舌の位置を學ぶのである。殊にイとエとは、第七圖にある如く、三角形の中央にあるもので、イからエ、エからアに至り、又アからオ、オからウに至る間の順序で、舌の高低がよく鏡に寫されるのである。なほ詳細に立ち入ると、舌の筋の運動であるが、これはアの發聲の時のやうな準備で、口を開いて鏡に向ひ、まづ音を兩側に廣げ、又中央に締め、または下の前齒の根に舌を据ゑて、舌を漸次に、舌上から舌本の方を高くし、又低くする訓練を施すのが肝要である。

次は軟蓋（こゝでいふ軟蓋は第三圖にある軟口蓋と懸壅垂とを併稱していふ、以下皆これに倣ふ）の運動であるが、これは口音と鼻音との大區分をする大切な働きである。即ち軟蓋を垂れると、鼻音となり。軟蓋をあげると、口音に

なるものである。即ちこの軟蓋のあげ下げの運動を、鏡に照らして見ると、



(圖四十第)動運の蓋軟

即ち第十四圖にある如く、充分に口を開いて、(充分に開かないと口の奥が見えぬ)軟蓋を上げるのである。例へばアーと發聲つゝ、口を充分に開くのである。而して又アーの音を漸次に調子を高めて、發音すると、懸壅垂が次第に上にあがつて、遂には全く軟口蓋と一致してしまふまで、充分に軟蓋の上

がるように訓練せねばならぬ。第十四圖の上にある圖は、即ちそれである。而してこの軟蓋を、口を充分に開いたまゝ下げると、第十四圖の下にある圖のやうになる。この時の發音は、ngのやうな音が出る。軟蓋上下の運動は、發音しないでも出来るが、發音しつゝ上下の運動をしようといふのには、a……ng……といふやうに、aの音を長くして、軟蓋を久しく上にあげおき、ngの音を短くして、軟蓋を暫く下にさげるのである。かくて繰返しつゝ、軟蓋の運動を自由にするのである。凡ての音を鼻にかけていふ地方の方言を矯正するのには、軟蓋の上がる運動を、充分に練習せねばならぬ事は、いふまでもない。

次は唇の運動であるが、第八圖に示した如く、母音發聲の時の唇の位置から始めて、その訓練の當初に於ては、むしろ極端に唇の開閉伸縮を行はねばならぬ。例へば通常アイウエオといふ時よりも、一層ひとく唇を運動させて、

アイウエオを連續的に發音するのである。殊にイとエとは、前に舌の運動の時に八釜しくいつた如く、唇の運動にも非常に關係があるから、この二音は充分に注意して、訓練せねばならぬ。又獨習の時は、敢て必しもアイウエオと發音するに及ばぬ、無聲で唯唇の開閉伸縮を行へば、それで澤山である。なほ殊に注意すべき事は、イといふ音が、いつもエとなる如き地方の訛音があるが、これにはイといふ時の唇の兩側を、充分に左右にひき垂れるやうにさせねばならぬ。頑固な唇ならば、手でひきはたけて、も、強制せねばならぬ。

以上述べ來た所で、まづ發音教授の豫備は、耳の整頓と、舌、軟蓋、唇との運動が出來たのであるから、これから一々發音教授の例に照らして、國語の不正な發音を矯正し、正確純良な國語を教授する實例を示さう。

第七章 發音矯正の例

まづ五十音順によつて、母音の教授例から始めよう。母音は決して聲音學上、容易なものでないから、實地の教授には、第一次に置く事が出来ない事は、既に縷陳した通りである。本書は教授の手加減に付ては、教育家諸氏に一任して、唯便宜上五十音順によつて説くのである事は、豫め御注意を願ひたい。さて母音の中で、アとオとは、大抵誤りなく發音されて居るが、その他のイウエの三音は、往々混同されて居る。

母音矯正

(一) イとウとの混同

忠義(チウギ)といふ事を、チーギと發音する人がある。これらの人は、衆議

院もシーギンといひ、入道もニードーといふのである。これを矯正するには、第三章に論述した原理により、第六圖第七圖及び第八圖を示して、各母音の性質中、イとエとの差別を、殊更明瞭に理解せしめ、又前章で説いた唇の運動を、充分に施行し、イ音の正確な音を訓練せねばならぬ。なほ練習問題としては、左にあるやうな混同しやすい音の、上中下にある者の例語を捕へ來つて、一々その發音を匡すのがよからう。

イミ(忌み) ウミ(海) イエ(家) ウエ(上) イロく(色々) ウロく

(狼狽) 以上イウの上にあるもの

メシイ(盲) ハナハダシウ(甚シウ) モナイ(用ひ) モナウ(用ふ) ハ

ウ(這ふ) ハイ(蠅、灰) 以上イウの下にあるもの

ニイナヒ(新嘗) ニウヨ(入用) ナウリ(忠良) ナイサイ(細い)

ヒイリ(日入) ヒウリ(日賣) 以上イウの中にあるもの

(二) イとエとの混同

イエ(家)のことをエ・といふ人は、誘引といふ事を、エーエンといふので、誠に聞苦しい。この訛音は茨城埼玉縣などに多くあるやうである。その他の所にもまだ澤山あるらしい。要するにエがイとなるのは、舌の運動が不足で、唇も從て不自由になつて居るのであるから、イ音を充分に訓練せねばならぬ。そは前章唇の運動の條で、くはしくいつた通りである。即ちイ音はエ音よりも、舌と口蓋との距離が、やゝ接近してきて、唇の方は兩側に引きつけられねばならぬ。さて練習問題としては、

エンキ(延期) インキ(墨汁) エチゴ(越後) イチゴ(苺) エマ(繪馬)

イマ(今) 以上イエの上にあるもの

コエ(聲) ユイ(鯉) オエ(畢) オイ(老い) サカイ(境) サカエ(榮)
以上イエの下にあるもの

ガクイン(學院) ガクエン(學園) キョーイン(教員) コーエン (公

園) ホーイツ(放逸) コーエツ(校閲) 以上イエの中にあるもの

なほ所によりては、ウエ(上)をエエといつて、ウとエとを混同して居る所もあるが、まづ母音の混同の最も甚しいものは、以上に揭示した二例であらうと思ふ。この母音の矯正は、以下説く所の子音と抱合した、成熟音の誤に皆及んでくるから、一番大切な教授である。母音が正しく發音されないと、つまり五十音圖のイ列エ列ウ列は、皆間違つてしまうのである。であるから返すくも、母音の厳格な教授が、言語發聲教授の基本とならねば、國語教授も全體がくづれてくるのである。恐るべく謹むべき次第である。

(三) イとユとの混同

ユウビン(郵便)がイービンとなり、ユウベ(昨夜)がイーベとなるのは、童兒の言語に於て、つねに聞く所であるが、大人に成つても、地方の方言には、

このユ音が完全に發せられない所がある。全体母音の i と子音の y とは、甚だ類似して居るので、充分に舌の運動を敏活にせねば、この i と y との區別が出來ぬ。

i は第六圖にある通り、y は第十圖にある通りで、i より y の方が、舌上で發せらるゝ傾向がある。i は口腔的母音で、y は舌上音の顎音である事は、既に述べた通りである。さればまづ y の子音發聲を教鍊し、ヤユヨの成熟音を發音せしめ、ユがイにならぬやうに、正確なる舌の位置を充分に會得させねばならぬ。

イ(射) ユ(湯) イミ(忌) ユミ(弓)

イヅ(出づ) ユヅ(柚子) ユリ (百合) イリ(入り) 以上イユの上にあるもの

アイ(愛) アユ(年魚) コイ(鯉) ユユ(肥ゆ) サカイ(境) サカユ

(榮ゆ) 以上イユの下にあるもの

ミユキ(行幸、深雪) ナマイキ(生氣) アサユウ(朝夕) ホーイウ(朋友)
以上イユの中
にあるもの

などを練習例として、一々そが發音の如何を試みる時は、その正否が明白に
わかる。

子音矯正

(一) キとナとの混同

ナンチャク(沈着)と金着(キンチャク)、マチ(町)とマキ(薪)とが區別されない人は、
ナキ(知己)とキナ(吉)との區別がたぬ。これは主として鼻にかけて物をいふ
人に多い。かの有名な國會議員で、緊急動議をナンキウドーギといったと
て、無學の惡評をうけたが、それは決してチンといつたのでなからうが、キ
の音が鼻にかゝるから、ナと聞かれたのである。これは前にいつた如く、軟
蓋を充分にあげて、鼻にかゝらぬやうにすれば、正しきキ音を發する事が出

る。なほ第九圖と第十圖とに照らして、kの子音とchの子音との異性質を、よく理會せしめ、さてのちイ音を正しく發せしめつゝ、それを成熟音として、キとケとの明瞭な區別を、訓練させねばならぬ。

(三) キとケとの混同

白金(ハツキン)ハツケン(發見)、イケ(池)イキ(生き)、ケシヨ(化粧)キシヨ(記章)の區別が出来ない人は、kといふ子音には差支がないが、イとエとの母音の抱合する際に、誤るものであるから、無論イエ兩母音の嚴密なる訓練を行はねばならぬ。

(三) ギとゲとの混同

ゲンヨ(原稿)かギンヨ(銀行)か、ハギ(萩)かハゲ(禿)か、ゲリ(下痢)かギリ(義理)か、區別が出来ないでは、とんだ誤を起す事である。これもgの子音には別に故障もないが、イとエとの母音に移る際に、舌の用意が不充分である

から、母音にたち戻つて、充分にこれが訓練を行はねばならぬ。

(四) ガイとギヤゝとの混同

僕は實にユゝギヤゝに堪へない、あゝ僕は實にギヤゝタンの至りである、といふ演舌を聞いた事がある。これは主に岡山縣あたりにある方言らしい。充分抱腹な方言である。ガイといふ直音が、直にギヤゝといふ拗音になるのであるから、これをなほすのには、まづアイの連續母音を充分に教練して後に、gの子音をその重母音の頭につける事を教へねばならぬ。ギヤゝの如き音は、國語の中でも最も醜音であるから、他人に笑はれるのも、無理でない。ギヤゝゝといふものは、雁か鴨かといはれる批評がつらくば、注意して速に直ほさねばならぬ。

(五) カとクゝとの矯正

小學校の字音假名遣では、カでもクゝでも、どちらでもかまはぬやうになつて

居るが、國語では區別が出来れば、出来た方に増す事はあるまい。カシヤ(借家)がクシヤ(菓子屋)とまぎれ、クシンイン(官員)がカンイン(姦姪)と聞えるなどは、あまり感服しないのである。東京でカとクとの區別が出来ないといった所で、全國の多數の人が區別が出来れば、糞も味噌も、東京語なら標準語にするといふわけにも行くまい。そもクをカといふのは、wといふ唇の子音を省いて、ずるく發音するからである。何もずるく發音するが、ほめたものでもなからう。これを矯正するには、ッ音から始めて、kの子音との連續に及ぶのである。決して六かしくもない、又到底言ひにくいといふ音でもないのである。

(六) ガとグとの矯正

これも東京人には區別されないであるから、ガンブツ(贗物)かグンブツ(玩物)か、ガチヨー(鷺鳥)かグッチョー(畫帖)か、ガガク(雅樂)かグッガク(畫學)か、少し

も區別がつかぬ。これを矯正するには、wの唇音を、中間に挿む事をするので、ッ音から初めて、gの子音の連續に及ぶ事は、カとクとの清音練習と同理である。

(七) シとヒとの混同

東京の人は、ヒロイ(廣)とシロイ(白)とのいひわけがつかぬ。而して廣い事をシロイといふので、白いといふ事は、マッテロといつて居る。かくて然り(シカリ)光(ヒカリ)、シキ(四季)ヒキ(墓)などの區別もつかぬ。これは大變な相違である。kは喉音で、sは顎的摩擦音であるから、全く異性質の音である。東京人のいひわけに、東都は火事を忌むので、ヒといふ事を嫌ふから、シといふのだといふけれども、そんな御幣かつぎは、硯蓋をアタリバユ、猿樂町をエテガクナ、ーといふ言語の嫌疑と、同一に論じられない。大島正健氏の「音韻漫録」には、shのSが抜けて、hとなり、アリマショー(animasho)が、アリマホー

(arimaho) になつたものだといはれたが、この理由からいへば、*see* の *s* が抜け
て *hi* となつたのであらうか。併し *シ* を *shi* とかくのは、羅馬字の上の事で、
聲音のから見れば、必しも羅馬字を當てにしてはならぬ。ともかく、喉音と顎
的樂音との大な相違である事を會得して、この混同を改めねばならぬ。

(八)

シとスとの混同

ス、(煤子)、シ、(獅子、鹿)、スシ(鮎)、シス(死す)、などの區別は、出雲及び東北地方
の人は出來ない、これは二重の矯正を要するのである。即ち第一にイとウと
の母音の混同を矯め、次にス(*si*)とシ(*shi*)との混同を矯め、而して最後にシ(*shi*)
とス(*su*)との正しき發音に及ばねばならぬ。そも(*sh*)は第四章の表にあるが如
く、顎的樂音であるのに、(*s*)は齒的樂音である。舌の上から見ても、舌上音
と舌頭音との相違がある。この異性質の發音を、分解的に教授して、後に初
めて正しき國語を、發音せしむる事が出来る。

(九) セとシェとの混同

國語の標準音は、セ(se)であるのに、方言では拗音のシェ(che)にいふものがある。これも前に述べた、sの齒的摩擦音と、shの顎的摩擦音との混同である。セイ(世々)をシェー(シェ)といふのは、正しい國語ではない。

(十) ゼとジェとの混同

ゼニ(錢)をジェニといふ方言がある、これはjとzとの混同で、前に述べた、セとシェとの混同が、唯濁音となつたまでである。即ちこれを矯正する法は、前條とかはりがない。

(十一) ジとヂとの矯正

この混同は、全國の過半がやつて居る事であらうが、土佐及び豊後あたりの人は、よく區別が出来る。即ちフジ(富士)とフヂ(藤)、ウヂ(氏)とウジ(蛆)、ジシン(自信)とヂシン(地震)、トジ(刀自)とトヂ(閉ぢ)、キシ(雉子)とキヂ(木地)な

とが、皆一々明瞭に發音されて居る。文部省の小學校令では、敢て區別するに及ばぬといふ事であるが、文字に書いた上では、不都合な事がある。例へばテンチ(天地)といつて、地の音はチであると教へて、地震、田地の音は、ジン、デンジであると書けば、充分矛盾した事を、生徒の腦裏に押し込むのであるから、區別が出来る丈けは、區別した方が正當であらう。自分にいへないからとて、古から立派な國語となつて居るもの、又現に正しく發音が出来た人があるのに、その音を撲滅してしまはうといふのは、少しく粗暴ではあるまいか。さてこの矯正法は、前の二條と同じく、顎的𪗇音と齒音との混同である。jはどこまでも舌上音の顎的𪗇音で、dは飽くまでも、舌頭音の齒音である。而してジは、jiで、ヂでdiである事は、第五章に詳述した通りである。

(十二) ズとヅとの矯正

ジヂの區別の出来ない人は、ズヅの區別も出来ない。又ジヂの區別が出来る土佐あたりの人は、亦ズヅの區別も出来る。さて第五章に示した如く、ズ(zu)は齒的齶音で、ヅ(dzu)は齒音の濁合音である。ミズ(見ず)ミヅ(水)、ハズ(筈)ハヅ(耻づ)、イシズエ(基礎)、ホーヅエ(頰杖)、クズ(葛)クヅ(屑)も區別が出来る限りは、區別して發音するがよろしい。

全體ジヂ、またズヅの區別を正しくする事は、ひとり國語の上で必要であるばかりでなく、進んで外國語を習ふ上に、大變な要用を感じてくるのである。もしこれらの區別が出来ないやうでは、舌が頑固になつて、到底外國語などを習得する事は出来ぬ。日本人の現状は、音が崩れて、怠惰に、放逸に、散漫に、不正に流れて居るから、充分に各種の發音を區別したいと思ふ。

注意までにいつておく事は、英語ではヅをdsであらはすので、羅馬字綴にもヅをdsuとかいてあるものもあるがdとsとは、濁音と清音との差があるから。

本書では濁合音として、dzを用ひたのである。文部省の羅馬字調査報告には、ズもヅも共にzuと書いてあるが、これは前條の理由によつて、吾人は贊同しかねる事である。(教育時論第五六四號以下拙文參考)

(十三) ナとツとの混同

シとストを混同する人は、ナとツとも混同して居る。ナ、(父)乳ツ、(筒)、ナキ(知己)ツキ(月)、ナル(散る)ツル(鶴)、マナガエ(間違)マツガエ(松が枝)などの區別が立たぬやうでは、日本國民として國語を知らない耻辱を受けねばならぬ。そもチ(chi)は顎的で、ツ(tsu)は齒音の清合音であるから、まづ子音のchと、tsとの訓練を行ひ、これと同時にイとウとの母音の發聲をも、教鍊せねばならぬ。舌上音舌頭音發聲の圖、即ち第十圖第十一圖は、明白に學習者の腦裏に刻まれて、これが實地演習にのぼらねばならぬ。

(十四) ヒとフとの混同

出雲あたりで、甚しいのは、フガシ(東)の方からフカく^くとフカッ(光)たといふやうな事を、いつて居る。充分聞苦しい方言である。これはイとウとの母音の相違もあるが、喉音と唇音との大差もある。全体波行ハヒフヘホを、*fi fu fe fo*のやうにいふ事は、上古の日本では正しかつたかも知れないが、今日の國語では、フばかり唇音となつて、他のハヒヘホは喉音となつて居る。そこで。

(十五) ヒとフゝとの混同

が起つてくる。ヒをフといふのは、甚しい誤で、無教育者に多いが、教育ある人の方言は、ヒをフゝといつて居る。これは上古の音であつたかも知れないが、今日の國語の標準音ではない。かういふ人は、又次のやうな誤が必然的に起つてくる。

(十六) ヘとフゝとの混同

平氏をフーシといひ、兵隊をフータイといふのも、喉音を唇音にいふので、正しい國語ではない。上古の波行は、パピプペポであつたといふ事は、夙に上田博士のP音考にもあるが、成程火のことを朝鮮語でも琉球語でも、piといつて居るやうである。Pの唇音がやわらげられると、fになるから、大古はPであつたのが、中古fになり、遂に變遷して、喉音のhとなつたではあるまいかと思ふ。ともかくも、ハヒヘホは、今日の國語の標準音では、喉音であるから、唇音にいつて居るのをば、矯正せねばならぬ。

(十七) ロとドとの混同

ドンゴ(論語)よみのドンゴ知らず、といふ語は、薩州あたりの人から常に聞く所であるが、これは流音のrがいへないで、齒音のdにいつて居るのである。流音の困難な事は、前々章に述べた通りであるが、第十圖と第十一圖とを比較し、その發聲の相違を實地に會得せしめ、正しき國語の流音を發音させ

ねばならぬ。

純粹の大和言葉には、語の上に良行の音がないから、この音がいへないのは、却て大和民族である、といふやうな、まづい口實はやめて、充分に舌のまはるやうにせねばならぬ。舌のまはらぬものは、小供で、小供は上古の民にくらべる事が出来る、上古の民がいはなかつたといつて、穴勝小供らしくなるがよいといふ事はない。堯舜主義は退歩主義で、決して日本主義ではない。

而して良行をいへない人は、又次のやうな誤を起すのは、必然的の事である。

(十八) リとヂとの混同

リンゴ(林檎)をヂンゴといふのは、ラムネをダムネといふ人にきまつて居る。而して又ルス(留守)をヅスといひ、レキシ(歴史)をデキシ(溺死)といつて居るに相違ない。つまり良行ラリルレロのかはりに、多行の濁音ダヂヅデドを代

用して居るのである。舌の上からいふと、rは舌上音でdは舌頭音で、その間誠に類似の點がある。即ち舌頭でいふのを、舌上でいふ相違が、甚だ僅かである。詳言すれば、顎的摩擦音と齒音との差違は、僅に舌の位置如何によるものである。併し良行のいへない人には、當初の練習として、極端に舌を卷かしめ、舌の運動をして自由にならしめねばならぬ。但し英語のLや朝鮮人のルの音のやうに、卷舌にならぬやう、正しい國語の良行音を教授する事は、教授者その人の技能如何による事であらう。

その他ワがヴ^uになりゴがコになりドがトになるやうな國語の不正な音を列記すれば、限もない事であらうが、要するに皆前々章述べ來た、學理と應用から出てくるのであるから、この根本智識があつて、又その精細な訛音を聞きとる程の耳のある人は、百發百中、いよく出で、いよくその正鵠にあたるといふ、愉快な發音教授が出来る事であらうと思ふ。

何分にも口でなければいへない事を、書籍の上で、而かも不完全な文字を使つていふのであるから、極精細な訛音を矯正する事などは、到底本書が堪へきられない重任である。以上に列記した發音矯正の例も、必ずその標準音たるべき假名文字の音の通りで無い者がある。例へば東北の人がナをツといふのは、決して假名文字のツの發音ではない。ツともナともツイともつかぬ、一種の鼻音の訛音である。その他地方の訛音は、すべて假名文字では書けない一種異様の音を發して居るのである。即ち前章の終にも言つたやうに、或標準音と或標準音との間に、無數の訛音があるが、その中のどれかの訛音を發して居るのであるから、その訛音を精密に直寫しようといふには、假名文字は勿論、羅馬字でも無能である。そこで發音と文字との關係に論及して、本書を終らう。

第八章 發音と文字との關係

文字といふものは、言語の發音を寫す爲めに作爲せられたものである。而して發音は千萬無量であるから、それを盡くあらはさうといふのには、まだ千萬無量の文字を作らねばならぬ。併し文字が多くなればなる程、不便で、學習に困難になつてくるのであるから、不完全ではあるが、標準音の主要な部分、あらはされるのを程度として、歐洲のアルファベットや、天竺の梵字や、朝鮮の諺文や、日本の假名は作爲せられたのである。これが實に文字の發明は人類が發明したものゝ中で、頗る尊い發明であつて、文學の基礎は、この文字規定の曉から光を放つて、人文學史上を照らし、而して滔々文明の潮流を注ぐのである。

日本の上代には、文字がなかつたので、漢字を借用して居たが、國語を寫す

には不便であるといふ所から、遂に假名文字を作るやうになつた。而かもその發明は、嘗て先進國たりし朝鮮の諺文より早く、諺文ノ發明ハ北朝後既に平小松天皇ノ時ニ當ル安朝の劈頭に於て、吾人はこの音標文字を創作したる事を誇らずには居れぬ。併し不足を云へば際涯のない事で、前にも屢々述べたやうに、假名は成熟音の文字で、子音と母音とが各別にあらはされないから、今日から見ると不便である。

そこで新國字問題が起つてきて、學者はこれが爲めに腦漿を痛めて居る次第であるが、この問題については、全く言語學のことに涉つてくるので、本書ではいふべき必要がない、學者の議論學者の理想はともかく、現に吾人國民が日常使用し、下は小學校より上は大學校に至るまで、この假名文字を以て國語をかきあらはして居るのであるから、現時の實際問題について一言しよう。

抑も假名遣といふものは、文字が發音に伴はないで、古のまゝ依然として存して居る結果である。小學校令で字音假名遣を廢して、寫音的の假名に改めたのは、この舊慣を打破した、進歩的快舉である事は、誰も認めて居る所である。而してこの愉快なる事業が、ひとり字音にのみ限られて、國語の歴史的假名遣に及ばないのは、矛盾である、不合理である、との非難は、多く聞かれるやうである。併し當局者は、社會と隔離しないやうに、教育の方針を定めねばならぬから、まづ字音のみにして置いたので、國語假名遣にまでは及ばなかつたのである。國語假名遣の改刷は、疑問である。

なんの疑問があらうか、速に國語にも棒引を斷行すべしとは、快論であるが、社會が守らぬ日に成つては、學校教育も何の爲めにするのかわけがわからぬやうになる。たとへ不合理であつても、社會が使用して居る國字は、教へねばならぬ。といつていつまでも不合理な歴史的假名遣を墨守する時は、到底

國語を發達せしむる事が出来ないから、早晚改めねばならぬが、社會と共に漸次／＼に改進して行かねばならぬ。一個人としては斷行説を主張して、その機運を早めるのも差支ないが、文部省としては聊か斷行に躊躇する方が、却て至當な事であらう、學理はともあれ、實事に於て實際に於て、

吾人は前章の發音教授の練習問題の例にも書いたやうに、少しも國語の假名遣を守らなかつたが、これは發音の例語であるから、さうしたので、なほ文章としては、昔の規則を守つて居かうと思ふ。又國語假名遣は、日本の綴字法であるから、假名遣を全く撲滅する事は、綴字法を全くなくするのである。綴字法を全くなくする事は、書く上には便利であらうが、見る上には不便を感じてくる。文字は書くばかりではない、見ねばならぬ、讀まねばならぬ。綴字法のあまりに複雑な英語や佛語やは、嘉すべきものでないが、全く綴字法のない、世界普通文字とか、視話法用文字とか、又は聲音學者が使用する

符號あり顛倒ある羅馬字も、一般の國字として見且つ讀む上には、不便である。電信記號や速記字で書いた文字は、一目讀過するわけにまゐらぬ。綴字法のあるのは、無論わるいに相違いが、少しはある方が便利な事もある。吾人の希望は、國語假名遣の体言を盡く、字音假名遣の例に倣つて、寫音的とし、用言だけは元のまゝにして置きたいと思ふ。体言の假名遣さへ廢すれば、實に綴字法の大半の勞力を節減する事が出来る。用言の綴字法は誠に僅少で、實に覺えやすく、又古書を讀むにも差支がない。小學校で字音を寫音的の假名にしたのは、進んでその假名を漢字に書き換へる事が出来るといふので、社會と衝突しない教育を授ける事が出来る、といふ一大理由が、改正字音假名遣案の主なるものであるやうに、聞いたが、もしさうであるとすれば、國語の体言を、字音の例によつて改めても、後に漢字に書きかへる事實は、同じである。用言も全然改めるがよからうけれど、到底非寫音的な假名文字を

いちめても、眞の發音は書けぬから、元のものゝにして置た方がよからうとは、吾人の宿論である。(教育時論第五六四號以下三冊拙文假名遣の將來參考) 吾人の希望は何ともあれ、一己の言、敢て施す所なきものである。今日の所、文部省令では國語の假名遣を守らねばならぬやうになつて居るから、その教授法はどうするかといふ事を述べた方が、むしろ空理空論を離れた、活問題であらう。

小學の初年級では、全く寫音的に假名を使用せしめて、差支がない、否むしろそれが正當である。これで以て言語を述べ、思想の發展を促すべきものである。而して漸次く國語假名遣を、以前に教へた寫音的のものと對照して、西洋のスペルリング的に教授したならば、文部省令にも違はず、社會とも衝突しない、國語の教授が出来ると思ふ。

まづ五十音文字は、その發音を一文字毎に匡し、前の第五章で述べたやうに

して一文字に唯一箇の發音を教へ、次にその一文字にして、二箇以上の音あるものを抜摘して、教へねばならぬ。例へば

(一) はひふへほをワイウエオ と發音す

いは(岩)をイワ・たひ(鯛)をタイ くふ(食)をクウ いへ(家)をイエ か
は(顔)をカオ といふが如し

(二) ゐゑををイエオと發音す

ゐど(井)をイド うゑ(植)をウエ さを(竿)をサオ といふが如し

(三) ちづをジズ と發音す

すち(筋)をスジ みづ(水)をミズ といふが如し

(四) うふむの上にくるかさたなはまやらをユソトノホモヨロ
と發音す

とかう(兎角)をトユー 推さうをオソー めでたう(目出度)をメデトー

行なふをオコノー 飛ばうをトボー 讀まうをヨモー やう(様)をヨー
有らうをアロー といふが如し

ガザダバの濁音ガゴヅドボとなる事はいふまでもなし

(五) けせてをキ^キシ^シナ^ナと發音す

はふ(今日)をキー せう(爲む)をシー てふ(といふ)をチー といふが
如し

(六) ふをオ^オと發音す

たふす(倒す)をタオス あふひ(葵)をアオイ あふぐ(煽く)をアオグ と
いふが如し

(七) むをン^ンと發音す

あらむ 行かむ せむ を アラン、ユカン、セン といふが如し

なほ昔の假名遣法を發音に併せて、教授しようといふには、次のやうな順序

でやるのが、合理で、簡明で、確實で、而して有効であらう。

(一) 發音通りい と書くべきもの

老い 悔い 報い

きぎし の音便

(二) んと書いてい と發音するもの

くらゐ(位) もとゐ(基) まゐる(參上) の類

(三) ひと書いていと發音するもの

あひだ(間) かひこ(蠶) やまひ(病) 憂ひ 言ひ の類

(四) 發音通りう と書くべきもの

植う 飢う 据う

かみをゐやまふひはおりほむへの音便にてう と書くもの

(五) ふと書いてう と發音するもの

けふ(今日) あやふし(危) ゆふべ(夕) 考ふる 仕ふる 添ふる の類

(六) 發音通りえ と書くべきもの

ひえ(稗) えだ(枝) 越え 見え 聞え の類

(七) ゑと書いてえ と發音するもの

つくゑ(机) ゆゑ(故) こゑ(聲) すゑ(末) の類

(八) へと書いてえ と發音するもの

いへ(家) うへ(上) 教へ 行へ 備へ の類

(九) 發音通りお と書くべきもの

おり(織) おのれ(己) およそ(凡) の類

(十) をと書いてお と發音するもの

をり(折) をとこ(男) とを(十) の類

(十一) 發音通りわと書くべきもの

あわ(泡) ことわり(理) よわし(弱し) の類

(十二) はと書いてわ と發音するもの

かは(川) くは(桑) には(庭) の類

(十三) 發音通りじ と書くべきもの

はじめ(始) みじかし(短) おなじ(同) の類

(十四) ちと書いてじ と發音するもの

うち(氏) あち(味) もみち(紅葉) の類

(十五) 發音通りず と書くべきもの

かず(數) すゞ(鈴) くず(葛) の類

(十六) づと書いてず と發音するもの

くず(屑) みづから(自ら) 出づ 閉づ の類

以上列記したやうに、發音と文字と伴はないのは、實に不合理であるが、仕

方がない。今日の社會では、又その語數も、体言の非寫音的歴史的假名遣を記憶せねばならぬとなると、殆ど千の語數に近い。この千有餘の國語綴字法を學生に強ふるのは、甚だ困難で、又慘酷であるやうであるが、用言即ち主として動詞の活用を教へると、過半は記憶し易い。又体言でも聊か語源を教へると、その大部分は合理的に理會ができる。(拙著國語綴字法參考)而して最後に困難なものは、僅々數十の國語に過ぎない。これを英語などのスペルに比べると、雲泥の差がある。國語の綴字法は、教授法さへ甘ければ、僅少の時間で、盡くこれを記憶せしめる事が出来る。かの初からして假名文字の發音を曖昧にして居つて、一文字に如何なる異音があるかといふ事を知らないで、又活用も語源も教へないで、唯不合理だといふのは、さういふ人が却て不合理ではあるまいか。

吾人は敢て古學偏狹の故でさういふでもない。又文部省令を尊信する故に、

さういふでもない。學理としては、どこまでも寫音的の完全な文字で、一字に異音のないやうにしたい。されば假名文字にも賛成しない、羅馬字も全然賛成しない。まだく完全不缺な寫音的の文字が望ましい。併し理想を述べて、教育の實際を忘れるのは、好ましからぬ事と思ふから、破壊主義でもなく、建設的でもなく、頑固たる古派にも流れず、突飛なる新派にもよらず、中庸を守り折衷を採り、歩一步國語國字の改善に向つて、滿天下の教育家と相提携して、進みたいと思ふのである。

また文字と發音とは全然初から一致したものでないから、片假名の一番畫の少いノフヘレといふ文字は發音としては、むしろ困難である。片假名の中で一番畫の多いボといふ六畫の文字も、發音としては、唇音であるから、却て容易である。そこで片假名平假名の字畫の難易と、發音の難易とは全く一致して居ないから、小學校の初期の教育で、字畫の易いものから教へるのは、

發音のた易い言語を教へるわけではない。併し出来る限りは字畫もた易くして、發音もた易いのを教へるやうにするが、國語讀本教授のとるべき方針である。

今尋常小學校の讀本の第一卷について調査して見ると、金港堂の甲種の本にはハ、ハナ、ハチ、ハリ、といふ文字が一番初めに出で居る、又金港堂の乙種の本にはハハ、ナチ、といふ文字が一番初めに書いてある。集英堂の本にはハ、ハナ、フナ、ハリ、といふ文字を以て開卷第一の文字としてある。而して富山房のはトリ、ハト、アリ、といふ文字が初めになつて居る。これらは皆假名文字の字畫の簡短であるといふ理由から、これらの言語文字を以て開卷第一に載せる事とせられたのであるらしい。これを發音の上から見ると、全く賛成が出来ない。全体ハといふ喉音や、リといふ流音は餘程六箇敷音である、殊にナチ、といふやうな八釜しい音は最初に教授するとしては、頗る難事で

あらう。字畫は多いけれど、ヂヂ、ババ、といふやうな唇音から始めたならば、發音教授の側から見ても、まづ無難といはねばならぬ。

而してまだ外に一層困難な事は、讀本の上では言語に對する觀念と、また挿繪とに一致を求めねばならぬ事である。ノといふ假名文字は至極簡短であるが、野といふ觀念を起させ、又野の繪を畫いた所で、その概念が兒童の腦裏に起つてくるかどうかといふ事は、實にむづかしい話である。そこでハ(葉)とかハナ(花)とかトリ(鳥)とかいふやうな言語文字が、出てくるのである。かういふ議論をもち出してくると、小學校の尋常第一年の讀本編纂は、とても出来ない相談になつてくるのである。斯道に幾多の經驗を積來つた、歐米諸國のリーダーでも、發音教授の順序によりて、編述したものがないから、無論後進のわが國には、まだく望まれない事と謂はねばならぬ。

併し讀本ばかりで、言語文字を教へる者でないから、教授者は充分に、文字

と發音との難易が相伴はない事を合點して、言語教授と文字教授との間には、適當なる區分を立てる事を忘れてはならぬ。日本の假名文字では字畫の多い濁音が却て發音には容易である、といふやうな原理があるから、文字に迷うて發音教授の正當な順序を忘却してはならぬ。直音の中でさへその通りである。又直音文字より拗音文字が、書く上には複雑であつても、言ふ上には中々容易なものもある。例へばトーサンといはせるよりも、トツチヤンといはせた方が樂に音を出させる事が出来る。ポーサンよりもボツチヤンの方が、言ひ易いに相違ない。併し拗音文字になると、假名を側に小さく書かねばならぬ面倒があるので、綴り方と話し方とは、到底步調を揃へて、併せ進む事が出来ぬ。その上日本の文字には漢字といふ大危介物があるので、世界無比の難教育を施さねばならぬ。センセイといふ文字を漢字で教へると、先（サキ）生（ウマル）といふ、國語の意義から、教へるとした所で、先はマツといふ事にもな

るし、生はイキルとも賀名生芝生のフともなり、又音ではシヨーともショーともなる。行といふ字の如きは、國訓でユク、オコナフ、となり、音ではコー、ギョー、アン、になる。文部省令に落ちた日本人が毎日生命をつないで居る米といふ字でも、ベイ、マイ、メ、コメ、ヨネ、など種々の發音を憶えさせねばならぬ。尋常小學の生徒がヒヤク（百）といふ事は習つたがピヤク、とかピヤクとかいふ事は習はなかつたといつて、家庭で一百と三百との發音を、教へたのを承知しなかつた。といふ實話も聞いた事がある。實に危介至極である、かういふ事を思ふと、小學教育の爲め、涙を灑いで漢字全廢を絶叫したくなつてくる。併し今日の所社會國家の大多數が使用して居る國字は、全く漢字であるから、暗涙を吞みつゝも教へねばならぬ。漢字の教授法まで説くのは、本書の問題以外の事であるから、拙文國語教授法（小學校教員檢定受驗用學科講義）に譲つて、こゝには全く省く事としよう。

ともかくにも、發音の原理が一通り。わかつてくると、假名でも漢字でも教授する上に、種々な新工夫新發明が出でこようと思ふ、本書は讀者に對して、その新工夫新發明を促す、導火線たるに過ぎないものである。

終に一言す、國語の愛、國家の愛。これが吾人の眞髓であつて、この事は實に國語の統一が國家の基礎を堅める上に、重大な關係を有つて居るものであるから、國音を正し、國語の標準音を以て、吾等五千餘萬の同胞が、異口同音に正しき、日本國語を話さむ事を切望するのである。この優美にして高尚なる、而していかばかり精密なる思想でも、言ひあらはされない事のない、國語を、新領土に教へ、支那朝鮮に授け、進んで世界のきはみ、黒船の烟の到りとまる限り、旭の御旗の光りわたらむ限り、吾が大日本の國語を普及したいと思ふ。併し孤島の蜻蜓州で、發音がかう支離滅裂になつて居ては、國語の普及擴張も、唯痴人の夢であらう。吾人は痴人の夢を語らうか、猛進

して外人に國語を授けようかといふに、まづ退て國語を統一させねばならぬ。敵を襲撃せむとするものは、まづその居城を堅めねばならぬ。今の時は、それ大和民族をして、盡く大和言葉を金城鐵壁と頼まする程の、國語教育の基を定めねばならぬ好機會であらう。この好機會を捉む人は、本書を讀む人の責任である。本書を書いた不肖の任務はいふまでもない。この重大な任務は一人一個の力によるべきものではない、幾千の教育家が、足なみ揃へて、國字國語の爲めに力を盡すべき事であらうと思ふ。あゝ國語の愛國家の愛。文字に書いたものばかりが、國語である、思つて居たのは、昔の夢。國語は口語で、口語は聲音であるから、文字ではない、文字は唯聲音の最要部の幾分を寫し出したものに過ぎない。文字は死んで居る、言語は生きて居る。生きて居る國語を知らない人は、教育者としては死んだものであるといはねばならぬ。この生々活々たる言語國語を教授する人は、是非とも聲音學の一斑

を知らねばならぬ。聲音學の何たるを知らないで國語教授を囑々する者は、いはゆる盲者蛇におちざる譬に洩れない。又聲音言語の原理を知らないで、教育者たらむと欲する人は、生理解剖の理を知らないで、醫者とならうとするものと一般で、危険千萬である。而して眞に國家を愛し、教育を重んじ、國語を尊ぶ人は、必ずこの聲音學を研究せられねばならぬ。本書は頗る小冊子ではあるが、木鐸となつて、斯道の勃起を促す上には、多少の効があらうと思ふ。ともかくも、斯學の先鋒として、不完不備なる所は多いけれども、あはれ國語の爲め、國家の爲め、

國語科
教授用
發音教授法
終

明治三十四年九月廿五日印刷
明治三十四年十月一日發行

發音教授法

定價金參拾錢

著者 高橋龍雄

發行
者兼

森山章之丞

東京市神田區表神保町二番地

發兌元 同文館

東京市神田區表神保町二番地

關西大賣捌

吉岡平助

大坂東區備後町四丁目七十八番邸



不許複製

再版發賣

石川倉次先生校閱
同文館編輯部編纂

國語科
教授用

口語文典

和裝本
全一冊

定價金參拾錢 郵税金四錢